改訂 帝國讀本

巻一

375.9
Ha7
資料室

41711
教科書文庫
4
810
41-1918
200030
2048

資料室 375.9 Ta7

大正七年十二月十六日
文部省檢定濟

文學博士芳賀矢一編

改訂

帝國讀本

東京 合資會社 冨山房發兌

廣島大學 教 38323 圖書

改訂 帝國讀本 卷一目次

目次

一 喜……一
二 學びの海（韻文）……七
三 九十の春光……九
四 ワシントン（口語文）……一二
五 乃木大將の少時……一六
六 東京……二〇
七 動物園（口語文）……二七
八 汽車の旅（一）（口語文）……三二
九 はがき便（書簡文）……三七

一〇　空中の征服……三八
一一　巴里の五月（口語文）……四四
一二　日本海の海戰　其の一……四九
一三　日本海の海戰　其の二……五五
一四　猫の作戰計畫（口語文）……六一
一五　智慧伊豆……六九
一六　日本國內の人種（口語文）……七六
一七　渡舟（韻文）……八二
一八　北白川の月影　其の一……八四
一九　北白川の月影　其の二……八七
二〇　頓智五題（口語文）……九二
二一　兄弟……九六
二二　余が軍隊生活（口語文）……九九
二三　猿（口語文）……一〇四
二四　富士登山……一一三
二五　夏休中旅行先の友人へ（書簡文）……一一八
二六　汽車の旅（二）（口語文）……一二〇
二七　水泳日記（口語文）……一二六
二八　座右の銘……一三二
二九　春夏秋冬（韻文）……一三四
三〇　鳥の美（口語文）……一三七
三一　天の橋立……一四三
三二　一燈錢（書簡文）……一四七
三三　少時讀書の三利……一五〇

三四　明治天皇の御遺物を拜す　其の一（口語文）……一五一
三五　明治天皇の御遺物を拜す　其の二（口語文）……一五六

自讀文

一　山の幸海の幸（口語文）……一六七
二　犬ころ（口語文）……一七一
三　東京だより（書簡文）……一七六
四　少年の美德（口語文）……一七九

卷一目次終

廣島大學圖書之印

改訂帝國讀本　卷一

幽谷を出でて喬木に遷る

一　喜

春は來れり。山の櫻は咲き、野の草は萠ゆ。遠山の雪は未だ消えざれども、小川のさゝやきは鳥の聲と共に長閑なり。新年を迎ふる喜にもまして喜ばしきは學年の始なり。まして今年は小學校を卒へて、中學校にうつれるをや。幽谷を出でて、喬木に遷るといふ鶯にも似たるかな。學友の多くは舊知の人なれども、新

しき友も半ばは交れり。新しき教科書を携へて校堂に上る嬉しさ。喜ばし、喜ばし。

中學校の學科は小學校のよりもむづかし。新に漢文、英語の加りたるも嬉し。理科、博物、數學、歴史、それぞれ專門の先生の授業を受けて、日一日と我が知識の增し、我が眼界の擴り行くことを思へば、前途の希望は洋々たり。校旗の下に校長の訓誡を受けたるは昨日なり。校歌の練習は未だしきところ多し。

洋々たり

兄君はすでに三年級になり給へり。妹は小學校の五年級に進みぬ。祖父母、父母、一家の人皆健かに、「次の日曜日には山の花見に行かん、辨當には何よけん」と

わきだめな

父君はのたまふ。我が家には春の氣滿てり。

おもへば六年の昔、小學校に入りし時はアイウエオの一字をも知らず、二三が六の計算だに知らざりき。今は數多き文字を覺え、算術を覺え、歴史、理科の一端をも學びぬ。學問の深さは際限なしと聞けど、何事にもわきだめなかりし六年の昔を顧れば、かくなるまでに訓へ導き給ひし師の恩、嬉しくも喜ばし。

新に中學生となりて、更に進みたる學問の道に入るは誠に幸福なり。昔は學ぶ志ありても、學ぶべき學校も無く、學ぶべき師も少かりきと聞く。我を學ばしめ給ふ父母の惠も嬉しく、學びの道のいとたやすき

大御代

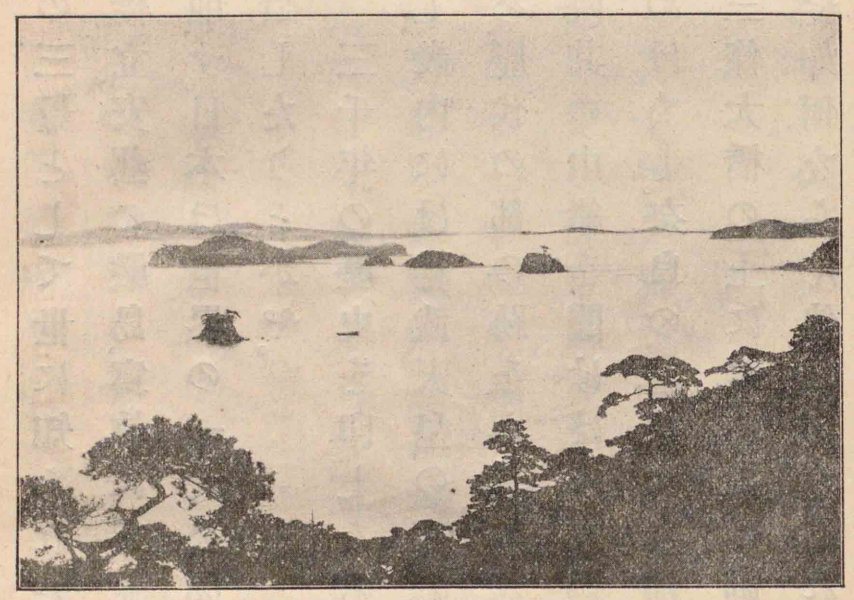
大御代の惠も嬉し。

つらく思へば、日本國の臣民と生れ出でて、此の大御代に遇へるは何よりの喜なり。世界の國々さまざまあれど、我が國史の如きうるはしき國史をもてるはなし。我が日本は建國の昔に君臣の分定まりて、萬世一系の大君代々相繼ぎて、仁慈の政もて民を惠みたまふ。君臣の間に父子の親みあり、一國は大なる一家を成せり。三千年の歴史を經て、國勢は愈〻盛に、今は世界一等國の班に入りぬ。日本臣民たる我等が心には、世界の人々の知り得ぬ誇あり、大なる喜あり。

君臣の分

班に入る

我が國は氣候溫和にして、四季をりく〻のうつり



讃岐屋島より望める瀬戸内海

かはりそれ〻に趣かはりて珍しく、春は花、秋は紅葉の樂しきながめ、いつも盡きず。山は青く水は清くして、山には早蕨を摘み、菌をあさる樂みあり、川には釣を垂れ、網をうつ興も多し。神々しき富士の山、繪の如き瀬戸内海、中にも日本

神往き魂飛ぶ

の三景として世に知られたる陸前の松島、丹後の天橋立、安藝の嚴島、寫眞にて見るだに神往き魂飛ぶ心地す。日本は世界の一大公園なりと、外國の人々も稱讃したりとかや。

印す

三千年の歴史を印したる名所舊蹟は各地方に多し。畿内には神武天皇の都し給ひし橿原の宮址を始め、歴代の都の跡をも尋ぬべく、それの神社、これの寺院、其の由緒を聞けば、みな過ぎし世をしのぶ種ならぬはなし。奈良の舊都に大佛殿の莊嚴を仰ぎ、京都の三條大橋の上に紫宸殿の御屋根を望む時、其の感懷や如何ならん。他日必ずこれ等の名勝舊地を巡遊す

由緒

感懷

人生の春

る時あるべしと思へば、早くも今より喜ばしさに堪へず。

我が身を思ひ、我が家を思ひ、我が國を思へば、すべて大なる喜あり。青年の心には常に此の喜の絶えぬなるべし。いでや此の喜の心を以て、日々の學業に勉め、父母の慈愛、師の高恩、大御代の恩澤に報いまつらん。時は今春なり。青年は人生の春なり。

二　學びの海

學びの海に漕出でて、

我等は中學一年生。

水天一碧

嬉し、嬉し、何となく。
ゆくてはいづこ、
いづこかゆくて。
　水天一碧、彼岸は遠し。
いでやためさん腕の力。
日本男兒の氣性にて、
なに到られぬ事かある。
　風はいかほど強くとも、
　波はいかほど荒くとも。

——中學唱歌——

波の花
二十四番の風
九十の春光

三　九十の春光

大町桂月

一

秋の風は泣くなり。冬の風は怒るなり。春の風は笑ふなり。

春の風の吹く所、そこに淡雪消えて若草萠え、谷川の氷とけて波の花まづ咲く。枯木活きて芽をふき、燒痕蘇りて蕨の柔しき拳、空を摑まんとす。二十四番の風吹盡して、梅咲き、桃咲き、櫻咲き、九十の春光到る處駘蕩として春は海の如く、人は花に送られ花に迎へられて、心おのづから長閑なり。

春はいのちなり、萬物みな活きて動く。春は愛なり、天地共に笑ふ。

二

梅や、桃や、梨や、李や、果實あるが故に墻籬の中に閉さるゝも、櫻は幸に食はるべき果實を有せず、野に、山に、到る處春を飾る。これ櫻ならでは得べからず。また日本ならでは求むべからず。我が日本を櫻花國とは言ひ得て切なるかな。

櫻は多きをよしとす。一日千本、滿山みな櫻、朝日と相映發す。何等の美觀ぞや。されど人跡絶えたる山奥、清水ちよろ〳〵と流るゝあたり、其の梢とも見えざりし一本の櫻の花にあらはるゝも、また興あらずや。散るを惜しむは櫻を愛する所以にはあらざるべし。一陣の春風に千片また萬片、惜しげもなく枝を辭して空に香雪を漲らし、地に錦繡を布く。櫻は散るさまこそ最も愛すべけれ。

三

榮花一路、胡蝶と人と相追ふ。春風の行方それと知られて、柳の絲靡くとも無く動く所、水車ゆるくめぐり、はねつるべ音無くして、小犬籬根に眠る。遙なる桃林の上に塔の見ゆるは伽藍あるにや。詣でて歸るとおぼしき村娘の一むれ、相和して歌ふ聲漸く細く漸

映發

(一)「深山木のその梢とも見えざりし、櫻は花にあらはれにけり。」(詞花集、源頼政)

香雪

榮花一路

伽藍

く遠く、つひに霞の中に消えゆく。

春日うらゝかにして、梅花一庭に薫ず。小猫縁に蹲り、少女二人追羽子を突く。風死して空に唸りし紙鳶みな地に落ち、一鳶ひとり高く舞ふ。

——わが文章——

一庭に薫ず

四　ワシントン

卓越

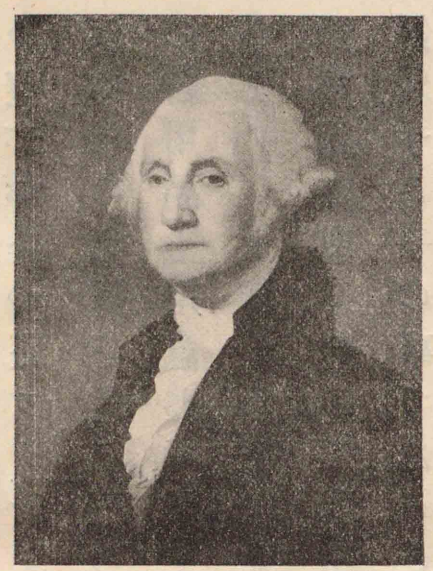
一世の豪傑と稱へられる人には、必ず萬人に卓越した材幹技倆はあるが、中には其の人格から見れば、さまで尊敬出來ない人もある。然るに亞米利加合衆國の獨立戰爭に、總大將として八年間の苦戰を續け、

材幹技倆

人格

(一)英國の壓制を脱せん爲に起せし戰。(西暦一七七五—一七八三)

功成つて第一世の大統領に推されたジョージ・ワシントンの如きは、其の人格から言つても、實に無類な立派な人であつた。幼年の時誤つて父の愛樹を伐倒し、僞らず其の事を白狀したといふ話も、其の性格の一端を示すのであるが、ワシントンが母に孝行であつた事は、次の話でも知られる。



ワシントン

ワシントンが十四歳位のころであつた、其の兄のローレンス(二)が英國の海軍に務めて居るので、ワシン

(一) George Washington. 西暦一七八九年選ばれて大統領となる。(西暦一七三二—一七九九)

性格

(二) Lawrence.

周旋
資格
支給
天にも昇る心地
何くれ
鍾愛

トンも海軍士官になりたい心であつた。兄の周旋で、いよ〳〵某軍艦の士官見習といふ樣な資格で採用せられることになつた。軍服も支給せられるし、日頃の望がかなつたワシントンは、天にも昇る心地して何くれの用意をし、二三のカバンの中には、それ〴〵の日用品も用意して、艦上へ送つた。さて母に會つて、いよ〳〵これから船に乘込みますと挨拶した。母は豫て此の事を聞いて承知して居つたが、さて又平生鍾愛する子の事であるから、今日となれば別れることが急に悲しくなつて、

「ジョージ、お前どうしても英國の海軍へ行くのか。」

ためらふ
水に流す
就職口
刹那
結局

と悲しさうに言つた。ワシントンは此の一言に感動して、暫くはためらつてゐたが、

「お母さん。お母さんがさうおいやなら、止めませう。」

と唯一言、豫ての志も、日頃の用意も、すべて水に流したやうに棄てゝ、折角兄を始め人々の世話してくれた就職口をことわつてしまつた。

此の一刹那のワシントンの決心一つが、世界の歴史に大關係があつたのである。世界の大富强國たる米國の出來たのも、ワシントンがあつたればこそで、ワシントンの母思ひの心が、結局今日の米國の仕合となつたのである。

(一)名は希典。陸軍大將。(一八五〇九―一九一二)

陋屋
着のみ着の儘
物々し

(二)名は季十郎、また十郎。
故實
武邊者

(三)本名は蓮華王院。京都市洛東にあり。

五　乃木大將の少時

横山健堂

乃木大將の家は長府の横枕といふ處に在り。家は僅かに六疊と二疊半と三疊との三つの座敷を有するのみ。かくの如き陋屋に住して、家族は殆ど着のみ着の儘ともいふべき有樣なりしかど、武具ばかりは物々しく飾り付けられたりき。大將は實に其の間に於て、父の教育を受けたりしなり。

大將の父は啻に武士的精神に富めるのみならず、武藝に達し、故實に通じたる武邊者なりき。彼は嘗て京都の三十三間堂に到りて、通し矢を試み、成功せし

Sparta.

耐久の限度

蒼天露臥

事ありと傳へらる。

彼は極めてスパルタ風の人なり。彼の屋敷は凡そ三百坪あり。家は小さく空地を廣くして、父子共に武を練る所としたり。

彼は嘗て人間の根氣と體力との耐久の限度を試驗せんと思ひ立ち、其の屋敷の內を晝夜駈廻り、第五日の夜に到りて疲勞して倒れたれども、尙能く談話し、所用を辨ずるを得たり。此を以て彼は、君命ならば五晝夜までは一睡せずして、其の任務に服するを得べき自信を得たりといふ。

彼は又蒼天の下に麥畑に露臥し、以て自ら心身の

健否を驗し、而して精神だに剛健ならば、能く純然たる野營にも堪得べき事を確めたり。

嚴冬の一日、大將が「寒い〳〵」と云へるに、彼は寒ければ暖くして遣るべしとて、大將の衣を剝ぎて裸體とし、井水を汲來りて、其の頭上よりあびせ掛くること三桶に及びたり。

老軀將帥の大任

大將が日清、日露両役に當り、老軀を以て將帥の大任に服し、終に寒いといひし事なく、一兵卒と同量の燃料にて、滿洲の寒氣に打勝ちしは、全軍の驚歎せし所に非ずや。大將が一冬學習院學生を率ゐて大演習を陪觀せし時も、旅舍に就きながら蒲團を被らず、唯

陪觀

外套一枚を以てごろりと疊の上に横臥して熟睡し、少しも元氣を損ずること無かりしは、教授、學生の齊しく感動せし所に非ずや。大將が此の如き勇氣は、蓋し少年時代の教育より得來りしなり。大將は維新前に於ける大武邊者の典型を、明治の文明時代に於て最も崇高に發揮したるなり。武士道の覺悟は、老少と婦人とを問はず、平時に於ても戰時に於ける訓練と修養とを怠らざるに在

乃木大將

典型發揮

一言以て之を蔽ふ緊張

體現

第五位に居る

り。一言以て之を蔽へば、武士の本領は終生緊張したる武士的精神を確保して、須臾も之に離れざるに在り。これ武士道教育の第一則にして、大將の如きは、此の教育の効果を、理想的に體現したる大人物ならずんばあらず。

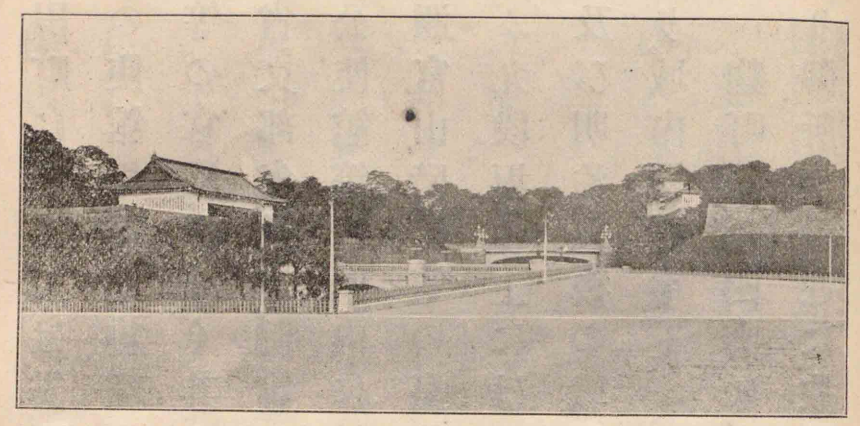
——大將乃木——

六　東　京

大日本帝國の首都東京市は面積五方里、町數一千四百六十九、人口二百三十餘萬を數ふ。人口よりいへば、世界大都の第五位に居る。

天皇陛下のいます宮城は市の中央に在り。二重橋外の廣場より、御堀を隔てゝ、宮殿の御屋根を拜し奉る。莊嚴なる光景世界に比類なし。

莊嚴光景



二重橋

宮城の周圍は麹町區なり。二重橋前より南して、櫻田門を出づれば、司法省、海軍省、外務省、霞ヶ關離宮、內務大臣官舍、貴衆兩議院等の宏壯なる建物甚だ多し。海軍省、司法省と背中合に、日比谷公園あり。廣袤五萬四千餘坪。外務省の附近、霞ヶ關より永

使館

田町にかけては、露西亞、伊太利、白耳義、墨西哥等外國の使館相接し、總理大臣、陸軍大臣、海軍大臣、大藏大臣、文部大臣等の官邸相續く。其の他陸軍省、參謀本部、大藏省、內務省、文部省、鐵道院等の諸官衙、英佛兩國の大使館、支那公使館等皆區內に散在す。伏見宮、有栖川宮、閑院宮、久邇宮、山階宮等の皇族方は、皆居を此の區內に占め給ふ。九段坂の上には有名なる靖國神社あり。維新前後及び明治以後の戰役に、國家に殉じたる人々を祀れり。域內櫻樹多し。

官衙

麴町區の西南に赤坂區あり。青山御所のある所なり。御所の附近に、故乃木大將邸あり。赤坂區の南麻布區には、東久邇宮邸、瑞西、暹羅の外國使館等あり。

國家に殉ず

芝區は北麴町區に接し、西麻布區に隣して、細長く南に延び、東宮御所、芝離宮あり。私立慶應義塾大學あり。芝公園內の增上寺は、德川氏の廟所として知られ、高輪の泉岳寺は、四十七士の墓所として名高し。

赤坂區の北に四谷區、其の北に牛込區あり。四谷、赤坂兩區に跨りて赤坂離宮、牛込區に陸軍砲工學校、陸軍士官學校あり。私立早稻田大學は區の西北に接す。

牛込區の東と北とに亙れる小石川區には、陸軍砲兵工廠あり。寺院の著名なるは傳通院、護國寺にして、學校には東京高等師範學校、盲學校、聾啞學校等あり。

(一)淨土宗の關東總本山。三緣山と號す。慶長年中德川家康の修築せし所。

(二)淨土宗。德川家康の母水野氏傳通夫人の墓あり。

(三)眞言宗。天和元年德川氏の建立。

本郷區は小石川區の東にあり。東京帝國大學、第一高等學校等在りて、學生の住居するもの多し。區の南部に湯島聖堂あり。幕府時代、昌平學校のありし所、今は教育博物

指點

館となれり。東京女子高等師範學校は之と相隣す。

下谷區は本郷區の東にあり。上野公園、不忍池を以て名高し。上野公園は面積十九萬五千餘坪、長松老杉欝蒼として、櫻樹其の間に交れり。惜しむらくは近年老樹の枯死するもの多し。公園内に東京帝室博物館、動物園あり、四時の遊覽者絶えず。東京音樂學校、東京美術學校、帝國圖書館等亦公園内に在り。公園の高地より、西は不忍池を隔てゝ本郷區を望むべく、東は下谷區の東半部と淺草區とを見下して、淺草區に名高き觀音堂をも指點すべく、又遙に隅田川を望むべし。隅田川は市の東部を流れ、吾妻橋、厩橋、両國橋、新大橋、

永代橋の五大橋を架す。東京高等工業學校は厩橋の近傍に在り、淺草區に屬す。川の東部なる本所、深川両區には各種の工場多し。

商業の最も盛なるは日本橋區、京橋區にして、ともに宮城の東方に當れり。京橋區の一部分は全く煉瓦造なり。濱離宮、農商務省、遞信省、海軍大學校、瑞典公使館等此の區内に在り。舊居留地には外國人の今尙住居するもの少からず。

神田區も亦商業の盛なる所なり。東京高等商業學校、東京外國語學校等あり。神保町通には新古の書籍を商ふ店軒をならぶ。

十德

吹荒ぶ

七　動物園

坂本四方太

動物園の入口にある丹頂の籠の側を、十德着たお婆さんが、子供を二三人つれて、

「これは鶴ですよ。鶴が鮪を食べました。」

と、かう語りつゝ行くのである。

うらゝかな日曜日の晝過であつた。恐ろしく北風の吹荒ぶ上野の森も、此の日は極穩かに晴渡つてゐた。隨つて觀覽人も頗る多い。後から後からと繰込んで來る。若いの、年寄つたの、軍人、書生、小僧、女中。それはそれは賑かな事だ。

氣を揉む
やをら

(一)Kangaroo.
不恰好

今しも板橋を渡つてあちらに往つたお婆さんは、はや象の前の群集にもぐり込んで、子供に見せてゐる。象は機嫌よく鼻を伸して、煎餅や何かを貰つて食べてゐる。食べて無くなると、汚い鼻の穴をこちらに向けて催促する。私の前の男は、今投げた煎餅の切れが餘り遠くに飛んだので、氣を揉んでゐると、象はやをら鼻を伸して、足元に吹寄せて食べた。これを見て、前の男も他の見物人も、手を拍つて喜んでゐる。

筋向のカンガルー(一)も、天氣が好いので、不恰好な足付で飛廻つてゐる。見物人はとり〴〵に評を加へながら、菓子をくれてゐる。

一平

ちよつとした坂を登つて高臺の上に出ると、眼下に園内を見下して、一平少しも凸凹が無い。森の際には猪や、鹿や、驢馬や、駱駝の小屋が並んでゐる。天は青青と晴切つて、向ふの東照宮の森が遙に見えてゐる。年寄つた園丁が乾草を車に積んで、ゆる〴〵と小屋の方へ挽いて行く。

駱駝の前に最前のお婆さんが來た。子供は既に驅抜けて、埒に上らうとしてゐる。お婆さんはうんと腰を伸して、「今度は駱駝になりました。まあの顏。御覽なさい。」と。そこに後から田舍の人が十人許どや〴〵來た。先達の親爺は、色の褪めた鳥打帽に紺ネルの頸

扮裝
端折る

卷、淺葱のパッチに日和下駄といふ扮裝で、裾を端折つて、先に立つて來る。續いて手提カバンを抱いた男、嚊衆や、婆さん達、或は更紗の風呂敷包を負うてゐるもの、草履を穿いてゐるもの、草鞋を穿いてゐるもの、皆樣々の仕度である。

皆口々に喋りながら山を下りて、狐、貂などの檻の前に出た。私は鴛鴦池の前の楓に眼を移す間に、嚊衆は早くもモルモット(一)の前の金網に額を押付けて、白鼠だとか、猫の子だとか、一段と騷いで居る。都人は其の勢に辟易して、道を讓つてゐる。

(一) Mormot.
一段と
辟易

私はやがて孔雀の前に立つて、暫く見てゐた。孔雀がぶるゝ尾を振つたと思ふと、羽を滿月のやうに擴げた。驚いた、其の高慢らしく構へて、籠一杯に擴つてゐる美しさは實にすばらしいものだ。これでこそ、鳥類の女王とたゝへても、溢美であるまいと思つた。

溢美

孔雀が羽を收めたあとに來た二人の書生、

「此の鳥は實際綺麗だね。」

「尾を擴げると、非常に綺麗だぞ。」

「擴げて見せないかなあ。」

「だめだ。擴げるのは、正午に一度と極つて居るのだ。」

眞面目

語る者も、聽く者も眞面目である。でたらめを言ふよと思ひながら、私は水禽池に歩を移した。―寫生文集―

八　汽車の旅(一)

東京の上野停車場から青森行の下り列車に乘りました。仙臺までは水戸を通つて行く常磐線の方が、海の眺もあつて面白からうとも思ひましたが、やはり東北本線の方を選びました。汽車の出發しようとする時、ちやうど頭の上の空を、一臺の飛行機が東の方へかけつて行きました。一時間ばかりの後栗橋(一)の鐵橋を渡つて、音に聞いた坂東太郎を越えました。間も無く宇都宮に着きました。こゝは栃木縣廳のある所で、西の方に日光の山が見えます。日光へ行くのに

(一)武藏國北葛飾郡。利根川の西岸。

はこゝで乘替へるのです。

宇都宮から北へ行くと、那須の平野へはいります。今は田や畠も開けましたが、昔は廣々とした野原であつたのでせう。

武夫の矢並つくろふ籠手の上に
霰たばしる那須の篠原

といふ源實朝の歌や、殺生石の話などを思ひ出しました。

白河に着いては、

都をば霞と共に立ちしかど
秋かぜぞ吹く白河の關

矢並つくろふ籠手の上にたばしる

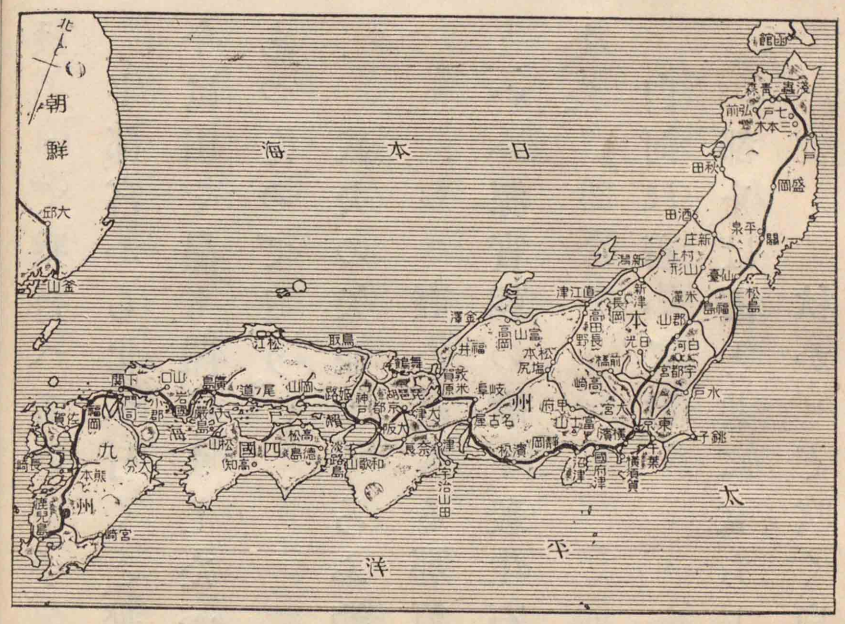
(一)磐城國西白河郡の首都。

(二)後拾遺集羇旅の部に出づ。能因法師の作。

(一)歌人。後鳥羽天皇頃の人。

苦計

分岐點



といふ歌から、昔の旅行の不便であつたことを思ひ、話に傳へた能因法師の苦計もをかしく思はれました。こゝは今馬市で名高い所です。

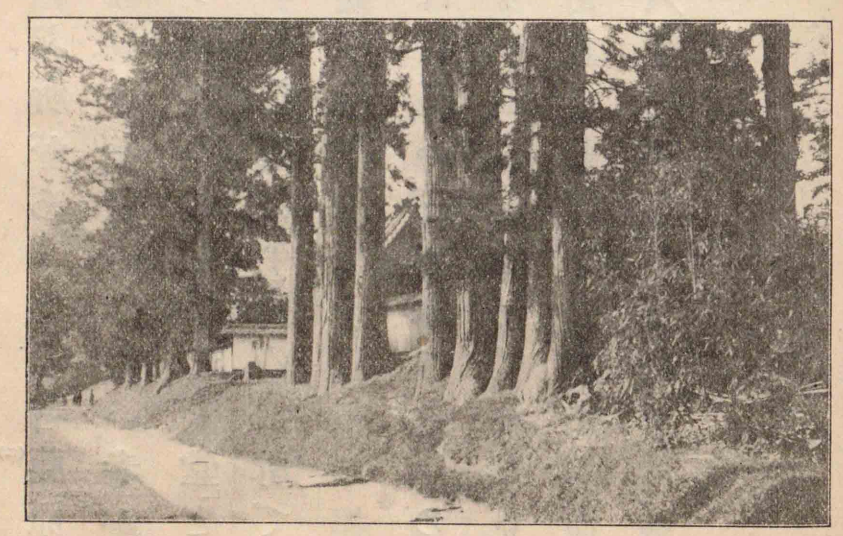
郡山は岩越線の分岐點、福島縣廳のある福島は奥羽線の分岐點です。

宮城縣廳の所在地仙臺に着いたのは、上野を

(一)竹に雀は伊達氏の紋所。

出てから十時間の後でした。日本三景の一といふ松島はこゝから近いのですが、急ぎの旅ですから寄りません、歸りには見物したいと思ひます。ふと竹藪に雀の居るのから、舊藩主伊達氏の事を思ひ出しました。

愈〻北へ進んで一關まで來ました。もう巖手縣



平泉中尊寺山門

(一)陸中國西磐井郡。
(二)藤原秀郷の後。
(三)松尾芭蕉の句。

です。此の近所に平泉(一)といふ所があります。昔藤原(二)氏が榮華を極めた處で、今も中尊寺といふ古い寺があると聞きました。「五月雨の降りのこしてや光堂」(三)といふのは、此の寺のことです。源義經は平泉の近所で討死したのです。盛岡は縣廳の所在地です。

青森縣に入つて、牧場に名高い三本木や、七戸(しちのへ)の附近を過ぎて、淺蟲のあたりへ出ると、始めて海が見えて、間もなく青森に着きました。上野を出てから僅か二十三時間で、四百五十六哩。埼玉、栃木、福島、宮城、巖手、青森の六縣を通つたので

さながらの繪

(一)此のこと口碑に傳ふ。誰の句とも知られず。
(二)陸前國宮城郡松島村大字手樽。

九　はがき便

(一)

汽車中にて辨當をしたゝめ、午後二時日光に着、直ちに東照宮へ參拜致候。白雪を飛ばす大谷川、其の上に架したる朱塗の神橋、老杉の綠と相映じて、さながらの繪に御座候。東照宮より大猷廟へまゐりて、唯今歸宿致したるばかりに御座候。明日は裏見瀧、華嚴瀧を見て、中禪寺まで參り度と存居候。

(二)

「松島(一)やあゝ松島や松島や。」と感歎して、他に妙句を案じ得ざりしとかいふ松島の全景を、今日富山(二)(とみやま)の上

より一覽致候。少々霧立ちて島の見え隱れ致候は、殘念にも覺え、又却つて面白くも覺え候。

華嚴瀧

(三)

今日盛岡泊、明日青森着、叔父樣の御宅へ參る豫定に御座候。盛岡以北は產馬の名所と聞及び候が、馬はお土產にも致しかね候。

一〇　空中の征服

大町桂月

大正五年四月八日、青山練兵場にスミス氏(一)の飛行を見る。氏既に機上に在り。一人プロペラー(二)を廻し、二人づつ翼の左右に在りて翼を抑ふ。プロペラーを廻せる人去つて、プロペラー廻轉す。前の四人去つて、滑走する間もなく、機は斜に上昇し、右に向ひ左に轉じ、見る〳〵數千尺の上に達し、練兵場の空に輪を描きしが、烟を吐出すと共に曲藝を始め、幾度か宙返りを爲し、直下するかと思へば直上し、又螺線をも畫がき、漸々下り來りて、最後の直下、あはや墜落するかと、手に汗を握りしに、忽ち機首を横に轉じ、見物人の頭上數尺の處を過ぎて、無事に地に着す。飛禽とても、かく

(一) Smith.
(二) Propeller.
滑走
見る〳〵
あはや手に汗を握る

驚歎の外なし

黄塵濛々

逍遙

怒號

動もすれば技神に入る

までの飛翔を爲す能はじ。人間の技にしてこゝに至れるものかと、唯々驚歎の外なかりき。

スミス氏の飛行は八日に始りて、十日に終りぬ。十日は風烈し。樹枝空に舞ひ、戸障子動搖して、見渡す限り黄塵濛々たり。風に向つて目を開く能はざるのみならず、室内にありても頭腦搔拐らるゝ心地す。余元來風を嫌ふの癖あり、風強き日は執筆する能はず。思ひ切つて郊外に出で、烈風を衝きて逍遙す。空には唯烈風の怒號するのみにて、一鳥だに飛ばず。風に向つて進むに、動もすれば身體後に退かんとす。如何にスミス氏の技、神に入れりとも、此の烈風を如何ともす

(一)Record. レコードを破る
(二)陸軍中將長岡外史。
(三)理學博士田中館愛橘。
廣言

涙を以て迎ふ

る能はざるべしとのみ思ひ込みしに、翌朝の新聞に、氏依然として技を演じたりと報ぜるを見て、余は覺えず涙を落しぬ。なほ新聞の報ずる所に據るに、同日の風力、上空にて三十二米ありき。三十米の烈風に飛行したる先例はあれど、三十二米に飛行したるはスミス氏が初にて、世界の飛行のレコード(一)を破りたるものなり。場に臨める長岡中將(二)、田中館博士(三)など、頻りに見合はせよと勸告したれども、「平生の廣言に對して、死すとも飛行せざるべからず。且飛行の娯樂に非ざることをも示さゞるべからず。」とて之に應ぜざりき。其の無事に技を終ふるや、滿場涙を以て之を迎へ

たりとは、げにさもあるべし

平常廣言を吐きながら、いざといふ場合になりて之を實行する能はざるものは、法螺吹なり。腰拔なり。風なければ飛行す、風あれば飛行せずといふにては、飛行機も未だ幼稚なるものなり。飛行家は如何なる烈風をも衝く意氣込なかるべからず。又唯空中の宙返りに世俗の好奇心を惹き、一場の娯樂に供するのみならば、飛行家は藝人のみ。スミス氏や藝人を以て甘んぜず、平生の言責を重んじ、死を決して三十二米の烈風に飛び、忽ち世界飛行のレコードを破れり。飛行界の勇將と謂ふべきかな。

意氣込

好奇心を惹く

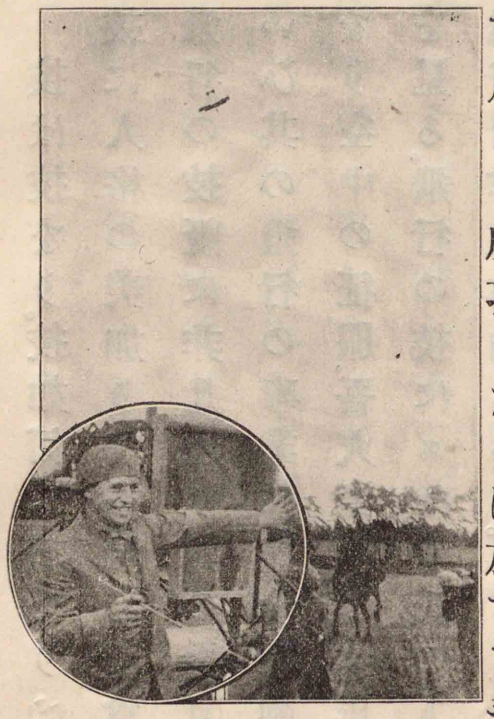
言責を重んず

快哉を叫ぶ

(一)源義經、平家追討の時、那須與一が屋島にて扇を射て要を貫きし事。

(二)源頼朝、木曾義仲を討つ時、佐々木高綱が梶原景季と宇治川の先陣を爭ひし事。

よしやスミス氏が當時墜落したりとも、吾人は其の意氣を壯とし、其の人格を偉とせざるを得ず。況や首尾よく成功したるに於てをや。これに對して快哉を叫ぶは淺し。昔、屋島(一)の扇の的や、宇治(二)川先陣の平家琵琶を聽きて、一座みな快と呼べるに、佐野天德寺ひとり那須與市と佐々木高綱との心中を思ひやりて、涙を流したりとの事なるが、苟も事を解する者



スミス氏の宙返り飛行

非凡

は、與市にも泣くべし、高綱にも泣くべし、スミス氏にも亦泣かざるを得ざるべし。

技は技なり。技如何に巧なりとも、唯巧なる技のみ。技に人格の美加りて技始めて尊ぶべし。スミス氏の飛行の技既に非凡なり。其の勇氣といひ、其の自信といひ、其の飛行の事業に盡す精神といひ、すべて非凡なり。空中の征服、吾人はスミス氏に於て始めてこれを見る。飛行の技にスミス氏の人格加りて、吾人は益〻飛行の尊きを知るなり。

一一　巴里の五月

(一) Paris.

島崎藤村

面白をかしく

山羊の乳を賣りに來る男が、朝早く此の町を通ります。幾頭かの山羊を引連れながら、面白をかしく笛を吹いて來るので、呼留めて買はうとする者があれば、すぐ其の家の前で、新鮮な乳を搾つてくれるのです。今朝も私は山羊の乳賣の笛に眼を覺しました。夢のやうに寢床の中で耳を澄すと、若草を吹く五月の風が、遠い牧場の方から、とぎれ〳〵に持つてでも來るやうな笛の音が、まだ朝のうちの玻璃窓へ傳はつて來て、何かかう自分等の心の底に眠つて居るものを誘ひ出すやうな心地が致します。故郷で飴屋の吹いて來る唐人笛を聞きますと、二度とは自分等の生

心を誘はれる

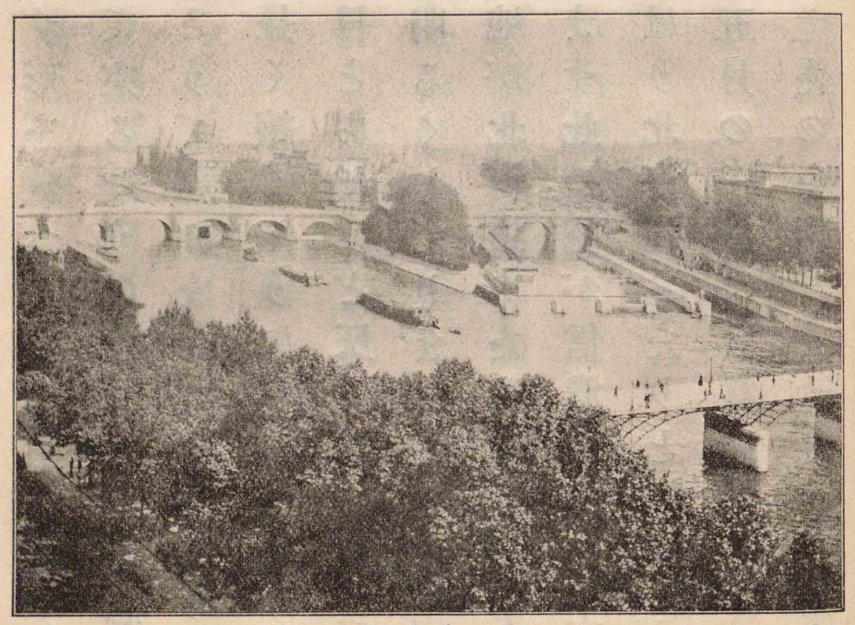
あわたゞしく散る

(Platane.(佛語))

涯に來ない少年時代の方へ心を誘はれるやうな氣が致しますが、此の山羊の乳賣の笛の調子が、何となくあの唐人笛に似て居ります。今少し澄んだ柔な音です。巴里のやうな大きな都會の空氣中にも、かうした田舍めいた情を傳へる細い幽かなしらべが流れて居るかと、珍しく思ひました。

只今は當地でも最も樂しい時です。輝いた日光は窓の外にあります。櫻の花があわたゞしく散つて、若葉に變つて行くやうな趣は、當地には見られませんが、でも春の過ぎて行くといふ心地が、私の胸に深く浮んでまゐります。日に〳〵茂つて行くプラタ(一)ーヌ

の並木の若葉が、少ししをれて見える時、其の葉の間に日光の滿ちた時、五月らしい雨が來て、柔な新綠の活きかへる時、私はまた遠い空の彼方に、曾て信濃の山の上で望んだと同じやうな、白い綿のやうな暮春の雲を見つけます。それが



巴里セーヌ河

黄昏時

微風に吹かれて、絶えず形を變へるのを望みます。長い黄昏時がまたやつて來るやうになりました。恐らく此の黄昏時は暮れさうで暮れない町の空氣の紫色と共に、もつと〳〵長く續くやうになるでせう。そして極短かつた冬の日とちやうど反對に、一晝夜の大部分を晝のやうに明るくしてしまふでせう。

地帶から言つて、當地が北海道あたりに近い事は、鈴蘭の花で思ひ當ります。此の花が信濃の山の上でも採集されるのは、やはり北海道あたりと氣候を同じくするからでせう。五月の一日には、當地の町々で鈴蘭の小さな花束にしたのを賣ります。それを幸福の象徴として、胸のあたりに挿して行く男女を見掛けます。

象徴

—平和の巴里—

一二　日本海の海戰　其の一

宙を飛ぶ

分擔の事業に當る

瞬くうち

天に冲す

副直將校宙を飛んで驅來り、『(一)敵の艦隊見ゆ。』との無線電信がありました。」と告げたるは、正に午前五時十五分。此の時早くも出港用意の信號、旗艦の檣頭に揭げらる。何人も待ちに待ちたる敵艦との出會なり。平生には思ひも寄らざる熱心にして迅速なる動作を以て分擔の事業に當り、用意は瞬くうちに整ひたり。見渡せば各艦の黑煙天に冲し、さなきだに威風凛

(一)露西亞のバルチック艦隊。
(二)明治三十八年五月二十七日。

意氣既に露國艦隊を呑む

時々刻々千載一遇

怒濤舷側を嚙む

展望

凛たる我が艦隊は、一層の偉觀を呈して、意氣既に露國艦隊を呑む。已にして旗艦三笠を先登とし、敷島、富士、朝日、春日、日進の順序を以て我が陣形を整へ、荒浪を蹴つて對馬海峽の東水道に向ふ。かくて進み行く程に、和泉よりの無線電信は、時々刻々敵の陣形と針路とを報告し來りしかば、千載一遇の時は來れりと諸士勇みに勇み、豪氣日頃に百倍せり。

折節南西の風烈しく、怒濤舷側を嚙んで、艦の動搖甚だしく、濛氣四方を鎖して、五海里以上を展望する能はず。やがて對馬の北方を過ぎしが、尙風波の靜まる樣子なければ、水雷艇隊に艦隊を離るべき命あり、

(一)對馬と馬關海峽との間に在り周回一里。

(二)Rozhdestvensky. バルチック艦隊司令長官。海軍中將。

舳艫相啣む

匹敵

國家の安危を此の一戰に賭す

同隊は避難所に向ひて航し去りぬ。

午後一時三十六分、敵の艦隊を沖(一)の島の西方に見る。ロゼストウェンスキー(二)長官の坐乘せる旗艦スワロフを先登として、アレキサンダー三世、ボロヂノ以下九隻之に續き、餘は濛氣の爲に見るを得ざれど、堂堂戰列を整へ、鼠色の船體に淡黃色の煙突は、一層其の形狀を鮮明ならしむ。舳艫相啣み、黑煙を靡かせて、我に向つて進み來る狀、何ぞそれ勇壯なるや。

艦數に於ては相匹敵し、戰艦及び十二吋主砲の數に於ては彼優り、裝甲巡洋艦及び八吋砲の數に於ては我優れる日露兩艦隊は、國家の安危を此の一戰に

龍虎相搏つ活劇

扼す

滿を持して發せず

興廢在

賭して、龍虎相搏つ一大活劇を茲に演ぜんとす。

一時四十分、旗艦三笠は敵の前路を扼せんが爲、針路を變じて敵艦隊に向ひしが、此の時檣頭高く、「皇國の興廢此の一戰に在り。各員一層奮勵努力せよ。」との信號飜りたり。全艦隊の士氣爲に大いに振ふ。

二時七分、敵まづ砲火を開き、盛に砲彈を放てども、距離遠くして、多くは海中に沒す。我は滿を持して未だ發せず。烈しき敵の砲火に堪へて、前進を續くること約

序幕は開かる

初陣

此一戰

東郷平八郎 書

六分、こゝに於て旗艦三笠始めて砲火を開く。これより我が艦隊は適當の位置を占むる毎に砲火を注ぎ、かくて幾日月待ちに待ちたる海戰の序幕は開かれたり。

両軍の砲煙は煤煙と相混じて海上を罩め、水中に落つる砲彈の水柱は空を衝き、西も東も轟々耳も聾せんばかりなり。敵は初陣の悲しさ氣や顚倒したりけん、訓練や足らざりけん、其の砲彈多くは命中せず。これに反して、我が各艦より擊出す砲彈は能く敵艦に命中し、其の爆裂の

勝敗の機既に決す

爲に、黑色の煤煙を揚ぐること數知れず。かくて二時四十分、彼我主力の第一戰に於て、勝敗の機は既に決せり。

三時十七分、我が第一戰隊は、全砲火を再び敵の主力艦隊の先頭に注ぎしに、敵は針路を轉じて我が鋭鋒を避け、我は之を追うて更に砲火を注ぎ、其の命中の狀、壯快を極む。

鋭鋒

これよりさき、敵艦オスラビヤの既に海戰の初期に於て火災を起し、聊か前部を海中に沒しつゝ、戰列を離るゝを見たり。さて此の第二回の激戰に於て、敵艦隊は全く擊破せられ、三時二十三分、旗艦スワロフも亦大火災を起し、戰列を離れて孤立するに至れり。

戰列を離る

一三　日本海の海戰　其の二

第二回の攻擊終りたる後、敵の主隊はいづれに行きしか、見渡すかぎり海上は砲煙と煤煙とに包まれ、僅かに旗艦の孤影を殘せるのみ。此の時予(一)は艦內を巡視せしに、兵員口を揃へて、「副長、御めでたう御座ります。」と述ぶ。誠に然り、天下豈かくの如き大慶事あらんや。祝辭の交換は單にこゝのみに止らず、上中甲板到る處皆然らざるは無し。宛然これ歲旦の光景なり。

孤影を殘す

(一)本文の筆者東郷吉太郎。乘艦は朝日。

祝辭の交換

四時三十分、我が主戰隊はスワロフに砲火を集注

壯絶又凄絶

敵ながら歎稱するに堪へたり

的中

しつゝ通過す。彼は既に半ば戰鬪力を失へる上に、今また砲火を浴びせ掛けられしことなれば、全艦忽ち黑煙に包まれ、焰煙熾に起り、やがて汽罐の破裂したるにや、黑煙蒸氣を交へて昇騰す。其の狀、壯絶又凄絶。

五時八分、我が驅逐艦のスワロフ攻擊のため突進するを認む。此の不幸なる戰艦は全部黑煙に包まれたれども、尙砲彈の發射を止めず、或は驅逐艦を防禦し、或は艦隊を砲擊して、飽くまでも抵抗す。其の意氣や愛すべく、敵ながら歎稱するに堪へたり。

予が艦の砲擊を中止せる時、今は敵艦に唯一つ殘れる十二吋砲の一彈我が前檣に的中し、破片司令塔

操舵

天晴なる働きぶり

彷徨

に飛入り、數人の死傷者を出したり。司令塔內に在りて操舵に從事し居たる一等信號兵曹は、此の彈片に右肩を貫かれしが、毫も屈する色無く、傍なる水雷長に向ひて、「我が右肩を見て給はれ。」といふ。水雷長顧てこれを探りしに、指を沒する程の裂傷にして、顏色既に蒼白となれるに、尙左手に舵柄を操つて、艦の運動を過たしめず、交代者の來るを待ちて、始めて繃帶所に赴きしは、さても天晴なる働きぶりかな。

かくて我が戰隊はスワロフに大打擊を加へて過ぎ、轉回して再び之に向ひぬ。途中二檣三煙突なる假裝巡洋艦ウラルの彷徨せるを認め、第一戰隊より全

焔煙天を覆ふ

線の砲火を集注したれば、彼は忽ち大火災を起し、焔煙天を覆ふが中に、まづ一煙突倒れ、次に一檣失せ、引續きて第二檣より第二、第三煙突まで悉く壞れ去つて、後部より海中に沒し、忽ちにして復艦影を認めざるに至りぬ。其の間僅かに五分。沈沒したるは五時五十分なりき。

これより北方に向ひて敵の主隊を捜索せしに、偶スワロフの北西方に當つて四隻の敵艦を認む。二隻は稍近く、他の二隻は距離甚だ遠し。我が戰隊はまづ近き二隻に向つて進み、相並びて砲火を交へ、逃ぐるを追うて戰ふこと大約一時間。七時十八分、敵の嚮導

漲り昇る

艦ボロヂノは後部に大火災を起して、火光天を燒く。

三笠艦上の東郷大將

時に我が旗艦三笠は針路を北方に轉じ、他の諸艦も之に從ふ。其の時富士は焔に包まれたるボロヂノに一彈を送りしに、爆裂して黑煙漲り昇る。誠に見事なる命中なり。續いて予が艦より砲火を注ぎしに、聊か前方に落ちたれば、予は距離を注意する中に、

目擊

今や遲しと

視界

ボロヂノ爆發したりと告ぐるものあり。見れば唯黑煙を殘すのみにて、遂に其の沈沒の狀を目擊すること能はず。以て如何に迅速に其の海底に急ぎしかを知るに足るべし。これ恐らくは火藥庫の爆發に因りたるならん。時に七時二十三分。

七時二十五分、戰鬪中止の命ありて、我が戰隊は北上す。時に日漸く西に傾き、驅逐艦、水雷艇は敵艦の周圍に集り、各攻擊の位置を擇び、今や遲しと期を待てるもの〻如し。

嗚呼、二十七日に於ける吾等の戰は終りぬ。夕陽既に天外に落ちて、視界漸く暗し。遙に南方を顧れば探

交錯

照燈の光は波上に交錯し、砲聲殷々として、遠雷を聞くが如し。これぞ我が驅逐艦、水雷艇の敵艦攻擊に着手せしものと覺しく、八時頃より十時頃まで止まざりしが、遠ざかるに隨ひ唯波の音のみ高し。

—東鄕吉太郎、掃露餘風による—

一四　猫の作戰計畫

夏目漱石

元氣旺盛

吾が輩はとう〳〵鼠を捕る事に極めた。

元氣旺盛な吾が輩の事であるから、鼠の一匹や二匹は、捕らうといふ意志さへあれば、寢て居てもわけなく捕れる。今まで捕らぬのは、捕りたくないからの

事だ。

春の日はきのふの如く暮れて、折々の風に誘はれる花吹雪が、臺所の腰障子の破から飛込んで、手桶の中に浮ぶ影が、薄暗い勝手用のランプの光に白く見える。今夜こそ大手柄をしてうち中驚かしてやらうと決心した吾が輩は、豫め戰場を見廻つて、地形を飲込んで置く必要がある。戰鬪線は勿論餘り廣からう筈が無い。疊數にしたら、四疊敷もあらうか。其の一疊を仕切つて、半分は流し、半分は酒屋や八百屋の御用を聞く土間である。竈は貧乏勝手に似合はぬ立派なもので、赤の銅壺がぴかぴかしてゐる。其の後の羽目

花吹雪

Lamp.

御用を聞く

板との間二尺が、吾が輩の鮑貝の所在地である。茶の間に近い六尺は、膳、椀、皿、小鉢を入れる戸棚となつて、狹い臺所をいとど狹く仕切つて、横に差出たむき出しの棚と、すれ〳〵の高さになつて居る。其の棚の下に、擂鉢が仰向に置かれて、擂鉢の中には、小桶の尻が吾が輩の方を向いて居る。大根卸、擂粉木が並べて懸けてある傍に、火消壺が置いてある。眞黑になつた椽の交叉した眞中から、一本の自在を下して、先には平たい大きな籠をかけてある。其の籠が時々風に搖れて、大樣に動いて居る。

是から作戰計畫だ。どこで鼠と戰爭するかといへ

すれ〳〵の高さ

交叉

自在

大樣に動く

便宜

てんで

書齋

ば、無論鼠の出る所でなければならぬ。如何に此方に便宜な地形だからといつて、一人で待構へて居ては、てんで戰爭にならぬ。こゝに於てか、鼠の出口を研究する必要が生ずる。「どの方面から來るかな。」と、臺所の眞中に立つて四方を見廻す。何だか東鄕大將になつた樣な心地がする。下女はさつき湯に行つて、歸つて來ぬ。子供はとくに寢た。主人は相變らず書齋に引籠つてゐる。細君は何をして居るか知らない。時々門前を人力が通る。通り過ぎた後は一段と淋しい。我が決心といひ、我が意氣といひ、臺所の光景といひ、四邊の寂寞といひ、全體の感じが悉く悲壯である。どうして

周密

も、猫中の東鄕大將としか思はれない。かういふ境涯に入ると、物凄い中に一種の愉快を覺えるのは、誰しも同じ事であるが、吾が輩は此の愉快の底に、一大心配が横たはつて居るのを發見した。鼠と戰爭をするのは覺悟の前だから、何匹來てもこはくはないが、出て來る方面が明瞭でないのは不都合である。周密に觀察して見ると、鼠賊の侵入するには三つの路がある。彼等が若しどぶ鼠であるならば、土管に沿うて、流しから竈の裏手へ廻るに相違ない。其の時は火消壺の蔭に隱れて歸路を絶つてやる。或は溝へ湯を拔く漆食の穴から風呂場へ廻つて、勝手へ不意に飛出す

納喊
遣過す
警戒

かも知れない。さうしたら、釜の蓋の上に陣取つて、眼の下に來た時、上から飛下りて一攫にする。それから、と、又あたりを見廻すと、戸棚の戸の右の下隅が半月形に食破られて、彼等の出入に便なるかの疑がある。鼻をつけて嗅いで見ると、鼠臭い。若しこゝから納喊して出たら、柱を楯に遣過して置いて、横間からあつと爪をかける。もし天井から來たらと、上を仰ぐと、眞黑な煤がランプの光で輝いて、地獄を裏返しに吊した如く、ちよつと吾が輩の手際では、上る事も下る事も出來ぬ。まさかあんな高い處から落ちて來る事も無からうからと、此の方面だけは警戒を解く事にす

懸念
自信
法のつかない
論據

る。夫にしても三方から攻撃される懸念がある。一口なら片眼でも退治して見せる。二口ならどうにかかうにか遣つてのける自信がある。併し三口となると、吾が輩も手のつけ様が無い。どうしたらよからう、どうしたらよからうと考へて、好い智慧が出ない時は、そんな事は起る氣遣は無いと極めるのが、一番安心を得る近道である又法のつかないものは、起らないと考へたくなるものである。吾が輩の場合でも、三面攻撃は必ず起らぬと斷言すべき相當の論據は無いのであるが、起らぬとする方が、安心を得るに便利である。安心は萬物に必要である。吾が輩も安心を欲す

得策
煩悶
成算
當惑
(一)Baltic.

る。よつて三面攻撃は起らぬと極める。

それでもまだ心配が取れぬから、どういふものかと段々考へて見ると、漸く分つた。三箇の計略のうち、いづれを選んだが最も得策であるかの問題に對して、自ら明瞭なる答を得るに苦しむからの煩悶である。戸棚から出る時には、吾が輩之に應ずる策がある。風呂場から現れる時は、之に對する計がある。又流しから這上る時は、之を迎へる成算もあるが、其の中どれか一つに極めねばならぬ事になると、大いに當惑する。東郷大將は(一)バルチック艦隊が、對馬海峽を通るか、津輕海峽へ出るか、或は遠く宗谷海峽を廻るかに

夜は淺い
休養
(一)川越の城主。寛文二年(一三二二)歿。年六十七。
獨占

就いて、大いに心配せられたさうだが、今吾が輩自身の境遇から想像して見て、御困却の段、實に御察し申す。

吾が輩はかく夢中になつて、智謀を運らして居る。夜はまだ淺い。鼠はなかく出さうにない。吾が輩は大戰の前に一休養を要する。

—吾輩は猫である—

一五　智慧伊豆

大町桂月

智慧伊豆とは(一)松平伊豆守信綱のことなり。其の伊豆守が智慧の名稱を獨占せるは、如何なる功業によるかと討ぬるに、格別の功業は無し。伊豆守は老中と

老中

(一)天草一揆ともいふ。寛永十四年肥前島原に起りし天主教徒の亂。

(二)三代將軍德川家光。(一二一六—一二三一)

なりたり。されど老中となりたればとて、特に智慧の名稱を得らるべくもあらず。伊豆守は島原(一)の亂を平げたり。されど島原の亂を平げたればとて、特に智慧の名稱を得らるべくもあらず。されば智慧伊豆の名は何によりて得たるか。

或時將軍(二)鷹狩して雲雀を多く獲たり。休息の際將軍之を味はれんとす。急の事とて、老中ども雲雀を金串に刺して燒くに、火强く、手先熱して堪へられず、急げば急ぐほど早く燒けず、大いに困り居たり。伊豆守後れて來り、傍に木片あるを見出し、それを金串に刺して燒くに、火熱手に及ばず、易々と燒くを得たり。而

頓智

(一)今の宮城の内堀に架したる橋。二重橋の東北。

も最も後に燒き始めし伊豆守が、最も早く燒き終へたり。他の老中ども舌を捲き、「平日の勤はとても伊豆守に及ばず。かやうなる假初の事だにも仕負けたり」。とて笑ひたりとぞ。これ一場の頓智なり。されどこれを以て智慧伊豆の智慧を證明すべきには非ざるなり。

或時將軍御堀にて小鷹狩ありしが、和田倉橋邊(一)にて、堀の水鳥を追立てよと命ず。しかるに何處を見ても小石なし。伊豆守ふと側の店に蛤を賣り居るを見て之を買取り、石の代りにして之を投げ、水鳥を追立てたり。これも一場の頓智なり。されど之を以て智慧

伊豆の智慧を證明すべきには非ざるなり。

或時將軍、朝鮮人の曲馬を覽んとて、(一)八重洲河岸に馬場を構へさす。事急なり。土手を築かんはなし得ぬにはあらねど、忽ち築き、忽ち取除くは無益なり。乃ち伊豆守の指圖にて、籠屋に命じ、數百千の竹籠を造らせ、其の上に芝を置かせて、瞬く間に晴の馬場が出來たり。これも一場の頓智なり。されど之を以て智慧伊豆の智慧を證明すべきには非ざるなり。

以上の如き逸話は一々枚擧するに遑あらず。少年時代の雀取の失策は有名なる話なれば、誰も聞知りたらん。(二)「一代將軍が、以て大事を託するに足る」と感ぜ

(一)麹町區丸の内、大手外郭の南にあり。

逸話枚擧するに遑あらず

(二)德川秀忠。大事を託するに足る

られしも宜なりけり。此の一事は以て伊豆守の人となりを知るべし。己は八裂にせらるとも主君の過失を言はず、世にも頼もしき人なるかな。

智の有無は生れつきにもよれど、少年時代よりの心がけの如何にも由るなり。請ふ、伊豆守が如何にして智を得たるかを見よ。或人伊豆守に向ひて、如何にして智を得たるかを問ふ。答へて曰く、「これ我一人の力にあらず。何人の智ももと格別の差なきものなり。若し我に智ありとせば、そは此の物のお蔭なり。」とて足を見せたり。其の足の甲に、畏りだこ三つ四つあり。足の甲にたこあるは、正坐謹聽に慣れたればなり。伊

(一)大河内久綱。
(二)松平正綱。(一二三六—一二三〇八)
才覺
(三)三代將軍。
丸寢
臨終

豆守曰く、「我が實父(一)も、養父(二)も、家康公、秀忠公に召使はれ、御才覺と御家法とを能く〳〵存じたり。我は幼少の頃より正坐して、實父、養父の教を謹聽せり。秀忠公、家光公(三)の御側に晝夜相勤めたり。御次に丸寢して、段段承ることを考へに考へたり。かくて足にはたこが出來たり、心には才覺が出來たり」と。嗚呼、伊豆守の智慧は正坐謹聽の賜なり。今の世の青年たるもの、豈伊豆守の足だこに就いて學ぶ所なかるべけんや。

伊豆守の臨終は殊によく智慧伊豆の實を發揮せり。伊豆守病んで將に死なんとせし時、三代將軍と四代將軍とより賜へる親筆の書を悉く取出させて、之を新しき藥研に入れて燒せたり。而して我が身と共に埋めよと遺言したり。何が故に伊豆守は將軍の手書を燒きけるぞや。其の中には世間に洩すべからざる秘密の事もありしならん。されど多くは伊豆守の功を褒めたるものなるべし。子孫若し之を鼻にかくることもあらばゆゝしき事なり。故に一切之を燒きたり。我が身の死すると共に、我と我が功を自ら沒したり。嗚呼、是智慧伊豆が智慧に相應する功業の世に現れざる所以なり。而して又智慧伊豆の智慧伊豆たる所以なり。

手書
鼻にかく
ゆゝし

—すゞりの水—

版圖

一六　日本國內の人種

坪井正五郎

國民と人種とは必ずしも一致しない。場合に依れば、一つの國民が純粹に一つの人種から成立つて居ることもあるが、通例は一つの人種が違つた地方に分れて、政治上別の國民となつてゐることもあり、又一つの國民が多くの人種から成立つて居ることもあつて、一人種と一國民とが一致する例は少い。

そこで、日本はどうであるか。元來の日本民族といふものは、既に純粹なもので無い。日本の版圖の擴るに隨つて、其の土地に住居して居たものが、自然に日

歸化

本人となつたこともあるし、又他地方のものが、「日本の國に歸化して日本國民になりたい。」といつて集つて來たものもある。即ち日本の北から南までの間に、種々の違つた種族が含まれて居る。

古くから國の中心に居た我々日本民族に、まづ言葉の上から最も緣の近いのが朝鮮、滿洲、蒙古人で、其の外亞細亞の北方にも關係がある。併し人種は、言葉のみで判斷は出來ぬ。體格上での「合の子」は両方の親に似るが、言葉には「合の子」といふものが無い。何れか勢力のある方に化してしまふ。それ故に體格の上から見て明らかに幾つかの人種のまざりと見える者

も、言葉に於ては一つといはなければならぬことがある。それ故に日本の場合でも、言葉の點では何所と類似が強いといつても、それを以て直ちに人種を判斷するわけには行かぬ。日本國内には種々の容貌、體格の人が居つて、日本人を批評した外國人には、「日本國民は鬚の多い人種に屬する。」といふ樣に言つたものもあるし、又「鬚の無い人種。」と言つたものもある。それは両方とも事實であつて、日本人中には鬚の多い者も、少い者も、殆ど無い者も確かにあるのである。

こんなことは純粹な人種の間には認められぬ。例へば、(一)アイヌの如きは男子に悉く鬚がある。(二)馬來人の

(一)Aimu. 北海道及び樺太に住む古來の種族。
(二)マレー(Malay)半島(亞細亞洲最南端の半島)及びマレー群島の住民。
(一)Esquimaux. 北亞米利加の北方に住する未開の種族。

如きは鬚が少い。(一)エスキモーの如きは殆ど鬚無しである。然るに日本人に於ては種々なものが雜つて居つて、此の點から考へて見ても、決して純粹の人種とは見えない。又容貌からいつても、幅の廣い、頰骨の高い顔もあれば、細面の人も居る。又身の丈で考へて見ても、平均を取れば幾らといふ數が出るが、日本國民は一樣に同じ位の身の丈とはいはれない。即ち容貌體格の點に於ても、種々の者が混じて居る事が分る。

歷史を見ても、古くから日本人中に種々なものが雜り込んだことが記されて居る。或は歸化した者もあるし、又漂着した者が其のまゝ本國に歸らずに止

つた場合もある。

地理上から考へても、北方には古くから蝦夷人が接觸して居つたに違ないし、南方を調べて見れば、馬來邊とも關係のあつたやうにも思はれ、又西の方を見れば、朝鮮の方に緣故がありさうにも考へられる。ちやうど容貌體格の上から見ても、或人々はアイヌの如く毛が多く、或人々は馬來人の如く顴骨高く、鬚が少い。又或人々は亞細亞大陸から朝鮮を經て、來たかと思はれる樣な容貌を現して居る。固より此等の者が種々に混じて居つて、或は二分八分、七分三分といふやうに雜つて居るので、純粹にアイヌと同じも

(一)昔我が國の東北部に住居せし未開の人民の稱

接觸

比較的

の、純粹に馬來人と同じものは見當らないが、比較的どちらが多く體格の上に現れて居るか、それを識別することは出來る。

思ふに日本の土地には、今日謂ふアイヌの分子、又大陸から移つて來た分子、南の方馬來地方から來た分子と、少くとも三つの分子が雜り込んで居るのは疑の無い事實である。固より此の三つのみから成立つてゐるとはいへないが、少くとも三つ以上の違つた人種が、日本人中に統一されてゐるといふ事は出來るのである。

一七　渡舟

坪内逍遙

波があや織る

村と村とのさかひ川。
波があや織る土手際に、
今日も人待つ渡守。
雨の日、風の夜、朝夕に、
渡呼びつゝ來る人は、
旅商人や、村の爺、
町の女房、役場員、
竿かたげたる魚釣や、

西國巡禮
小荷駄馬

獵犬つれし若紳士、
西國巡禮、角兵衛獅子、
郵便配達、小荷駄馬。
なりも言葉もいろ〳〵が、
暫し乘合ふ舟の中。
知るも知らぬも知合うて、
語る間も無く向岸、
思ひ思ひにおりたちて、
西へ、東へ別れ行く。
行くを送れば又來る、
相手は日々に變れども、

變らぬ流、おなじ主。
岸の青柳、水の月、
波間の鳥もなじみにて、
春秋いくつ重ぬらん。

—國語讀本—

一八　北白川の月影　其の一

西村天囚

明治二十七八年の戰役終りて、臺灣の地は我が有に歸したれども、兇賊なほ其の地に據りて王化に服せず、險を恃みて敢へて王師に抗せんとせり。(一)北白川宮能久親王殿下近衛師團長として、兵を率ゐて之を討伐し給ふ。

王化に服す
險を恃む
(一)陸軍大將。明治二十八年薨。御年四十九。

(一)五月三十一日、宮は臺灣の北海岸なる澳底に御上陸あり。此のあたりは人里遠き磯邊にて、立休らひ給ふべき軒端も無く、やう〳〵沙の上に幕を張り、毛布一枚とてもあらざれば、唯怪しげなる椅子一脚を進らせて御座所とす。折ふし樺山(二)大將參られ、此の御有樣を見て、「あなかしこ、こゝは皇族の始めて御足を新領土に印し給ひし處なれば、後の世までも傳ふべし。」とて、木を削りて筆太に、「近衛師團長陸軍中將大勳位能久親王殿下幕營之地」と記してぞ建てられける。

此の夜雨降り、蚊さへ多くして、人々いもねられず、食物も不自由なりけるが、誰とも知らず、畑の甘藷を

怪しげなる
(二)名は資紀。海軍大將。
あなかしこ
いもねられず

掘取りて來りければ、そを泥のまゝ沙に埋め、そが上に火を焚きて、蒸燒にして宮に進らせしに、宮には御手づから泥を掃ひ、皮を剝きてめされけり。

明くれば六月一日、(一)基隆さしてぞ進ませたまふ。御晝食は柳割籠なる御辨當にて、副食物はたゞ梅干二箇のみなりしが、「けふは殊の外うまかりき。」と御沙汰あり。此の夜より、全軍皆道明寺糒を用ふ。道險にして、糧食運搬の便無ければなり。いかにもして、宮には常の食を進らせばやと人々苦心しけれども、せんかた無かりき。翌日は三貂大嶺の險を越えて、舍營につき給ひしに、夜の九時に及べども未だ進らするを得ず。

(一)臺北の東北約八里。

やう〳〵從者恩地某(一)が不慮の用にとて袋に入れて負來りし乾果と懷中肉汁とにて飢を凌がせられ、明日は必ず基隆を攻落して三鞭の盃をこそ擧げめ。」と打戲れ給ひ、怪しげなる寢臺に、鼾聲雷の如く御熟眠あらせられたり。宮の御大勇は申すまでも無く、貴き御身を以て、寛宏の量に富み、忍耐の德を積ませ給へること、誠に武將の鑑とや申さん。

(一)時の北白川宮家令恩地輹。不慮の用

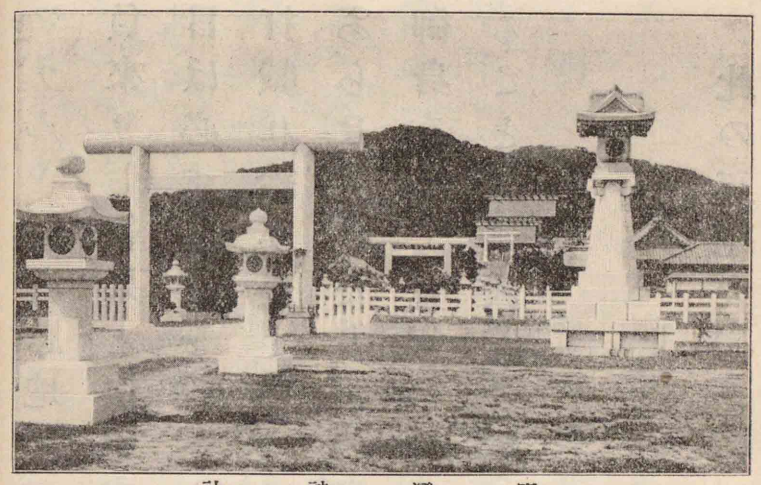
寛宏の量に富む

一九　北白川の月影　其の二

此の三貂大嶺といふ山は、上り二里、下り三里半もやあらん、音に聞えし峻坂にして、御馬に召さるべく

拾はせ給ふ

もあらず。餘りの御痛はしさに轎を進めしに、轎夫の辛勞を御覽じて、畏くも棄てて召されず、險路を物ともし給はで、勇ましげに拾はせ給ふ。士卒之を見て、足の勞をも打忘れつゝ、敵前に進みけり。



臺灣神社

此の日朝のほどは日照りて熱かりければ、傘を進らせしに、宮は「戰の場にありて照降傘は要なし」とて用ひ給はず。されども餘りに熱かりけれ

しとゞ濡れそぼつ

(一)坂井重季。

ば、薄を切りて日覆とし給ふ。

山を降り給ふ頃より雨降出でしかば、傘を進らせしに、宮は「士卒皆雨にうたれて戰ふに、我のみいかで傘を用ひん」とて、暴雨に沐し給ひ、御軍服もしとゞに濡れそぼち給ひ、敵前近くなりぬれば、目立ちもやせんとて勳章を脱し、草鞋姿かひ〳〵しく、御脛のあたりまで泥に塗れ、青竹を杖つきてぞ進ませ給ふ。勇ましう見奉るものから、皇族の御身にてかくまで國に盡し給ふ御有樣、畏くも亦あはれなり。坂井聯隊長の御前にまゐりて、たゞ「殿下」と一言申して、後に續かん言葉も無く、涙にくれて、御顏をだにえ拜み奉らざり

けるこそことわりなれ。

三貂嶺の山路にて、はや戰の始りし頃、左手の方より擊出す賊の銃丸は雨の如く、幾度か宮の御頭の上を掠めけり。我が兵これを退けて、宮は遂に峠近く登りたまふ。折しもあれや、左手の山の頂に構へし壘壁より雨霰と射いだしゝを、「しや小癪なり、たゞ一揉に揉みくづさん」と勇み立つたる猛夫ども、鬨を作りて無二無三に突貫し、瞬く間に攻めちらしつ。峠に登りて前面を見れば、水田渺茫として川は其の間を流れ、見る目はるけき山際には人煙繁華の巷あり、これぞ基隆とは知られたる。忽ち砲聲殷々として彼方に聞

折しもあれや
しや小癪なり
無二無三
見る目はるけし

ゆ。豫て定めし時刻なれば、これなん敵壘と我が艦隊との激戰ぞとは知られける。

既にして山を下り給ひしに、賊兵と覺しくて、一百ばかり此方へさして逃來るを、我が兵邀へて之を擊つ。銃丸は宮の御頭の上を過ぎ、颼として響あれども、彈道高くして、何の御怪我も無かりけり。かくて基隆も陷りければ、宮は市街の北端なる賊の本營に入らせられんとし、敗兵の狙擊もやと、まづ門内を窺はせられしに、果して銃丸ぞ飛來にける。さてこそと搜索せしに、天井又は床の下、此處の隅、彼處の蔭に、二人或は三人、都合十四人の賊兵あり。抵抗せし者どもは、皆

颼として

引捕へて斬殺しつ。かゝる危きを踏ませられても御身に恙なかりしは、誠に天の助にや、そもく御威風の致すところなりけんかし。

—北白川の月影—

二〇　頓智五題

和田垣謙三

寓話

件

何食はぬ顔

因業

一、ラ・フォンテーヌの果物

佛蘭西の寓話作者ラ・フォンテーヌ(一)は、毎朝食事後に果物を食べる習慣があつた。或朝のこと、後でと思つて、一個の梨を爐棚の上に載せて置いて、ちよつと書齋へ行つた。其の間に一人の友人が來訪したので、

(一) La Fontaine.（西暦一六二一—一六九五）

室へ通した。彼が再び其の室に來て見ると、件の梨が見えぬ。「おや、誰か梨を食べてしまつたかしら。」訪問客は何食はぬ顔で、「僕ではないよ。」「君でなくつて幸だ。實は鼠を退治しようと思つて、あの梨に亞砒酸を入れて置いたのだ。」友人驚いて、「そりや大變だ。解毒劑は無いか。」「安心し給へ。今のは梨泥棒を見出す爲の僕の計略だつたよ。」

二、辛抱と强情

或老人の馬車と、因業な青年の馬車とが、長い狹い山路の一角で、ぱつたり行合つた。老人の方は後戻するには七八町も行かねばならず、青年の方は僅か半

町ばかりに過ぎなかつたが、青年は敢へて後戻することを肯じない。ものの半時間も睨み合つた擧句、青年は老人を凹ましくれんものと、悠然と新聞を讀始めた。老人「新聞があいたら貸して下さい」。青年は遂に引返した。

ものの半時間

三、冷たい慰藉

命旦夕に迫る債權者

命旦夕に迫れる病人、親切らしく訪ねて來た債權者に向ひ、「今度といふ今度こそはもうだめだ」。債權者「何をばかな。しつかりなさい。返濟の義務の完結しない中は、何でそんな事があるものですか。」

四、けしからぬ國

取れゝばこそ

或人露西亞旅行中、數頭の犬に吠えつかれた。石を拾つて投附けようとしたが、固く地面に凍りついて取れゝばこそ。天を仰いで歎じて曰く、「けしからぬ國もあるものかな。犬を放して石を繋いで置くとは。」

五、外交的辭令

甲乙の兄弟が共に食事をした。卓上に菓子が二つあつた。甲は一つを平げて、又もや手を出しさうにした。乙「それは私の分だよ」。甲「其のお前の分を間違へて先へ食つてしまつた。御免よ」。と彼は遠慮なく自分の分として、第二の菓子をも食つた。

——西遊スケッチ——

子を見ること親に若かず

(一)藤原秀衡。
(二)國衡。
(三)高衡。
(四)泰衡。
(五)忠衡。

二　兄弟

柳澤淇園

子を見ること親に若かずといへり。奥州の秀衡(一)は男子五人あり。兄の錦戸太郎(二)は常に良き馬を好みて、山野を乘ることをつとめ、元良(三)の冠者は女子を友として遊ぶことを專らに好み、伊達(四)の次郎は山川の漁獵を好みて、他の事をせず。泉(五)の三郎は武具を好みて、よき物ある時は求め來りて自ら試み、刀劒なども作ものは人にも讓り與へて、良しからざるは擺き折りては棄てたりとぞ。何れも文學の道を習はするに皆嫌ひて、たゞ他の業のみを事としけれど、泉ばかりは夜を日に繼ぎて文學の道に凝り勗めたり。

或時秀衡は子供の志を試し見んとて、秋の末つ方金華山へ皆々を伴なひ、山上に席を設けて、山河の風景を眺望する折から、子供を集めて申しけるは、「何れも、遙なるあなたの山の尾の上にひと木の櫻あり、今を盛と見えて、花の爛漫として咲けること、雪かあらぬか。みなく〳〵の目にも、さぞかし見ゆらんや。」と申しけるに、おの〳〵のび上り立上りつゝ見て、「いかにも父の仰せの如く、櫻花今を盛と見えて、しかもうるはしく見え候なり。」といふに、泉ばかりは暫く眺めつれども櫻花の見えざりければ、父の側に到りて、「仰せに

尾の上

隨ひ見參らせ候へど、我が眼には花らしきもの少しも見え申さず」とて、打連れて歸りぬ。

秀衡心に思ふには、花無きを有りといひしは、彼等が志を見んとてのてだてなるに、四人はみな實無き花を、我に詔ひて有りといへども、泉ばかりは無き故にこそ無しとはいひけれ。勇は錦戸すぐれたれども詔ふ心あり。元良は柔弱なり。伊達は義あるに似て勇無く、泉は勇少しといへども義ありといへり。

其の後九郎義經奥州に來りて、秀衡をたよりて居ける頃、鎌倉より討手下向の時、秀衡泉ばかりに遺言して、深く義經の先途をたのみ置きけり。果して錦戸はじめ兄弟達みな義經に反きけるに、泉はひとり義に死して、芳しき名を後世にとゞめたりとぞ語り傳へたる。

——雲萍雜志——

二二　余が軍隊生活　五十嵐　力

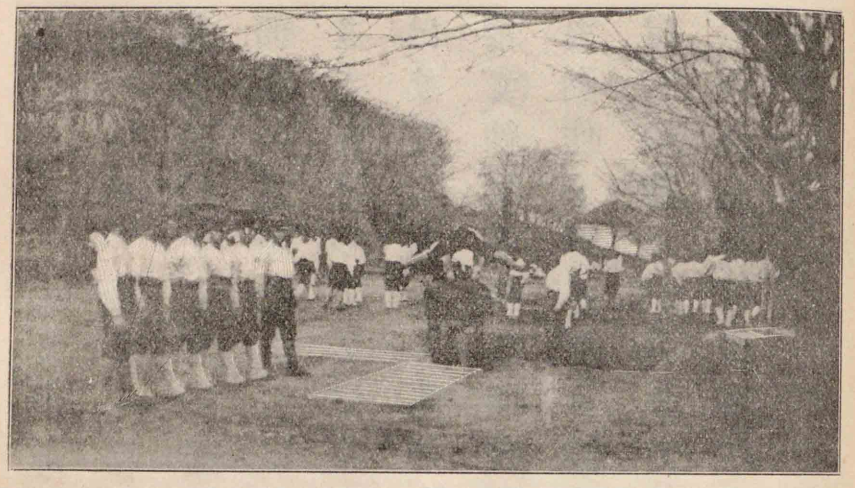
余は昨年徴兵檢査に合格して、當聯隊へ編入された。今は新兵として毎日こゝで教育を受けて居る。朝から晩まで練兵に餘念なく、殊に檢閲が近づいたといふので、殆ど烟草すらのむ暇が無い。やつと舍内に歸つて一息しようとすると、古兵から「新兵々々」と呼立てられる。又軍事に關する學科が、いつも夕食後と

檢閲

定まつて居るので、まづ消燈後床に就いてからでなければ、我が身で我が身の心持はせぬ。

さうはいつても、これを余が在郷當時に比べれば、まだ〳〵何でもない。鋤、鍬を擔ぎ、星を戴いて出で、月を踏んで歸るいそがしい農家の生活、殊に年中で最もせはしい收穫時などと來ては、とてもこんな事どころではない。頑丈な體でもそれは〳〵眼が廻る位。昔から諺にいふ「泣く子も眼を開け」とは、此の忙しなさに、我が子を誡める言葉なのである。

人はかれこれいふけれど、余は誠に軍隊が好きである。寢起から飲食から、坐作進退、皆時あり節あつて、



兵營の器械體操

今まで起居に定めが無く不規律であつた者には、實に善い躾である。余は常にこれを愉快に心嬉しく思ふ。又君の御爲、國の爲、一朝事の有つた日には、これが御間に合ふ御楯でもあるかと思ふと、嬉しさは身にも餘る程である。

余はまた器械體操が大層好きである。日課として時々これを課せられるが、何時も

名殘惜し

干渉

假設

髣髴として

時間が少いので、解散の時には名殘惜しく思はれる。それでまた後から、自分一人でやつて見る。自分の得意な技術を、上官の干渉無しにやる、これがまた頗る面白い。日曜などには外出する前に、ちよつと運動場まで駈けつけて、鐵棒にぶらさがるのが例である。余はまだこれよりも好きなものがある。それは野外演習で、練兵場の各個教練とか、分隊教練とかで練上げた動作を、野外で實地に活用するのだから、いふにいはれぬ興味がある。たとひ假設でも敵が設けてあるのだから、戰爭の事どもが、目の前に髣髴として浮び出る。勇み立たないでは居られぬ。

股肱と頼む

余が最も好む所といふのは、まだこれらの外にある。好むといふよりは寧ろ熱心なので、それは學科である。身體が如何程强壯でも、軍事教練にどの樣に長けて居ても、戰術が如何に巧みであつても、之を實地に動かすには、實に其の人の心が至らなければだめだと思ふ。それ故、將校が最も意を注いで教へて下さるのが學科である、否、精神教育なのである。余は此の學科が最も大好きである。なぜなれば、其の初めにはいつも、畏くも天皇陛下から吾等軍人に賜はつた勅諭を讀みきかせられるが、其の勅諭の中には、恐れ多くも、「朕は汝等を股肱と頼み、汝等は朕を頭首と仰ぎ

てぞ、其の親みは特に深かるべき。」と仰せられてある。

草莽の微賤

余等草莽の一微賤も、斯様な尊い勅命を蒙つて、どうして感激せずに居られようか。日本帝國の軍人たるものが、「朕は汝等を股肱と頼み。」といふ勅を承つて、誰一人感涙に咽ばざるべきぞ。かういふ次第で、余はまことに軍隊生活をなし得たのを、幸福だと思うて常に喜んで居るのである。

感激

感涙に咽ぶ

—作文三十三講による—

二三　猿

提督

或日M提督が自分に猿の話をして聞かせた。提督がまだ艦長で居たとき、敏捷な小さい(一)チンパンジーを放飼にして、名を(一)ジョッコーと呼んでゐた。檣に昇つたり、船の底にはいつたり、水兵が演習をすると、其の眞似をする。水兵はそれを面白がつて、皆でかはいがつて居た。ちやうど陸軍に聯隊で飼つて居る犬がゐるやうに、此の猿は軍艦の猿になつてゐた。

然るに或日(二)ダイヤモンドを嵌めた指環が、筐に入れた儘で紛失した。一人の水兵が嫌疑者にせられた。其の水兵は艦長の前に出て、無造作にかう言つた。

「艦長殿、私がダイヤモンドを盗んだと思はれてゐるのでありますか。」

艦長は答へた。「さうさな。とにかく猿が取つたとは

(一) Chimpanzee.

(一) Jocco.

(二) Diamond.

嫌疑者

無造作

探索の手掛
探偵
監視

誰も思つて居ないやうだ。」

此の言葉を聞いたとき、水兵の頭に或考が浮んだ。水兵は探索の手掛を得たやうに思つた。それからはちやうど探偵が嫌疑者を監視するやうに、水兵は軍艦の猿を監視し始めた。

二三日立つて、水兵は石炭庫に天鵞絨の小さい筐のあるのを見出した。それが石炭の中に埋めてあつたのである。誰がこんな事をしたのだらう。どうも猿らしい。

水兵は忽ち工夫して、猿の腕首を摑んで、筐のあつた所へ連れて行かうとした。ところが石炭庫が近くなればなる程、猿が震へ出した。ちやうど犬が自分の糞をした所へ連れて行かれるのを嫌ふやうに、軍艦の猿は石炭庫へ行く事を嫌つた。とう〳〵庫に來て、水兵が筐を見出した所を猿に指さして見せると、猿の黑い目に恐怖の色が現れた。そして猿は祈禱をするやうに、両手を合はせた。

祈禱

それから水兵は虛の筐を出して猿に見せて、指に指環を嵌めたり拔いたりする眞似をして見せた。猿はそれを見てゐたが、暫くして意外な事をし始めた。猿は指の爪で不細工に石炭の中を搔搜し始めた。間も無く石炭の中から贓品のダイヤモンドが出て來

贓品

途方に暮れる

視線

處分

た。

そこで水兵は艦長の前へ出た。「艦長殿、盗人が分りました。これが寶石で、これがそれを盗んだ奴であります。」

猿は此の言葉が分つたらしい樣子をしてゐた。分らぬまでも、此の場で何事か訴へられ、又聽取られてゐるといふことを悟つてゐたに違ない。猿は途方に暮れた樣子で、頭を低れて、視線を船の甲板の上に落してゐて、艦長の顏を一目も仰ぎ見る事が出來なかつた。

「さうか。此の役に立たずめを、どう處分してやつたものだらうかな。」と艦長が言つた。

機會を捕ふ

刑を執行す

評議の結果、猿を取調べていよ〳〵有罪ときまつたら、窃盗をした水兵と同じ刑罰に處するがよからうといふ事になつた。航海は退屈なものだから、何か慰になるやうな事があると、誰でも其の機會を捕へようとするのである。取調は一種の軍法會議を組織して行ふことになつた。猿の辯護をする役人も出來た。そこで中世風の裁判をして、刑罰に處するか、放免にするかになるのである。

猿はとう〳〵有罪と極つて、刑を執行される事になつた。しかしそれは眞似だけにして置かうと議決

された。金剛石の持主は赦免の請求をしたが、此の請求は、銃口を猿に向けた上で採用するが好からうといふことになつた。

此の銃殺の眞似を、水兵共は樂みにして待つた。

愈〻其の日の朝になつて、猿は(一)ブリッヂへ連れて行かれた。そして銃を持つて水兵等が自分の方へ向いて來るのを見て、不便な猿は途方に暮れた目をして、一人々々の顏を見た。一人の水兵が、進み出て、白布で猿に目隱をして遣つた。其の時、猿の痩せた手足はぶるぶる震へた。猿は何か恐ろしい事が實行せられる、そして、それが自分の身の上だといふことが分つたのである。

(一) Bridge.

不便

自分の身の上

「撃て。」といふ號令が掛ると、不便な猿の全身は、電氣を掛けられたやうに震へた。此の場の危險が分つたのだらう。猿は両手を縛られてゐた繩を引きちぎつた。頭の背後で結んである目隱の布をかなぐり棄てた。そして銃を構へた水兵等、それから士官等、物見高い乘客や判事などの群を見渡した。其の目の中には、恐怖と憤怒と努力の三つが電光の如くに閃いた。それから大膽に身を跳らして、一人の士官の肩の上に飛上つた。次に一人の水兵の肩に移つて、非常な速度を以て、舷に飛附いて高く叫びながら、海に飛込んだ。

かなぐり棄つ

物見高い

電光の如く閃く

(一)Boat.

波と戰ふ

「やあ、海へはいつた。猿が海へはいつた。」かう言つて、大勢が舷へ馳寄つた。水兵の中には、猿を助けに續いて海へ飛込まうとした者もある。「ボート(一)を卸せ。」と言ふ者もあつた。此の騒はむだであつた。不便な猿は暫し水面を泳いで、波と戰つてゐたが、とうゝ沈んで見えなくなつた。

M提督は此の話をしてしまつて言つた。「言ふまでも無く、それから先の航海は、何となく物悲しかつたのですよ。こんな事を言つたら、貴方は笑ふでせうが、猿が溺れてからは、艦内で笑聲がしなくなりました。ちやうど親類か友達の死んだ時の様に、何物を見るにつけても、不便なジョッコーの事が思ひ出されてならなかつたのです。」

—森林太郎、諸國物語による—

仲兄

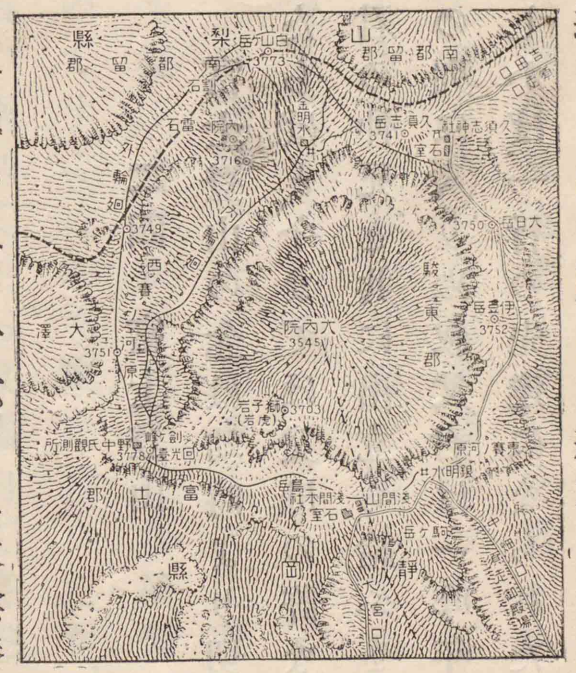
先達

二四　富士登山

富士登山の念は幼時より切なりしが、中學に入りたらばと、今までは父母の許なかりき。今年の夏叔父君の、仲兄と共に出立ち給ふを、よき序なればと同行の列に入りぬ。叔父君は一昨年も、昨年も登山し給ひしかば、一行の先達になられたり。

富士の登山口はいづれの方面にもあり。東は須走及び中畑に、西は大宮に、南は須山にありて、みな駿河

に屬す。北よりの登山口のみは、甲斐の吉田にあり。各道とも山の腰より絶頂までを十合に分つ。一合の間距離の長短等しからず、合毎に石室ありて、登山者の休泊所とす。



今年の八月十六日は太陰暦の七月二十日なり。中畑口より登らんと志して御殿場を發したるは、夜の十二時なり。月光晝よりも明るく、裾野を行くに、百合、女郎花、撫子をはじめ、名も知らぬ草々みな花ありて、時は夏の半ばなれど、こゝは秋意酣に見えて、爽涼體に快し。

秋意酣爽涼體に快し

裾野の盡くる所馬返しなり。此より先馬利かずとて此の名あり。いつしか樅、檜、路を夾みて、冷氣いよいよ身にしむ。俗に草山三里、木山三里、禿山三里といふとぞ。二合目あたりにて、明けやすき夏の夜ははや白みぬ。

五合目あたりよりは所謂禿山に入りて、木も無く、草も無く、燒石ばかりを踏みて行く。寒冷益加りて、山

陰には殘雪さへ見ゆ。六七合目より上は空氣も稀薄なれば、呼吸の喘も苦しく覺ゆるに、一歩は一歩より嶮なれば、登山者の持つなる金剛杖を力に上りゆく。

喘

持つなる

八合目を越ゆれば、胸突八町なり。最も嶮しき所にて、岩石の間路無き路を攀ぢて進む。頂上に達せるは午後の二時頃なりけん。余等一行より稍後れて上りし富士道者の一行は、一時間も前に到着せりといへり。

頂上には周圍十五六町にも餘れる大噴火口の迹を環りて、八峰並び立てり。劔が峰最も嶮し。噴火口の外部を巡るをお鉢廻りと稱す。途に金明水、銀明水の二泉あり、清冽なり。

清冽

空はよく晴れたれども、脚下に雲起りて、風光しばしば變ず。駿河、相模の海灣、足柄、箱根の山脈、皆下界に低くして、一小盆景の如し。

下界に低し

盆景

木花開耶姫を祀れる淺間神社に憩ひて、金剛杖に烙印を乞ひ、社前なる石室に宿りぬ。廣さは二十疊位、板敷の中央に爐あり、同宿者十五六人、みな二三枚の蒲團を重ねて寢ぬ。日出の壯觀を見逃すまじと、一同早く起出づるに、寒氣堪難し。東方に紫の雲漂ふと見るまに、薄紅となり、深紅色となり、やがて朱盆の如き朝日の輝き出でたる、日本畫には未だ描かれざる景色なりと思ひぬ。

烙印

午前七時降路に就く。降路は須走とて、砂の上を滑り下るなり。一度踏出づれば、杖も足も止らず。四足の草鞋を踏破りて、木山を通りて草山の須走に着きたるは午前十時。上りには十四時間を費しゝが、下りは僅かに三時間なり。

御殿場の停車場にて東京へ行き給ふ叔父君と東西に別れて、仲兄とともに家に歸りしは十七日の夕なりき。登山の快を語りて、素願を果したる喜を父母に謝するに、父母もほゝ笑み給ひぬ。

素願を果す

ほゝ笑む

二五　夏休中旅行先の友人へ

拜啓。長き暑中休暇も已に其の半ばを經過致候奥羽地方への御旅行、紀行文にも、寫生畫にも、さては採集嚢にも、定めて獲物の饒多なる事と羨望に堪へず候。僕は豫て御話申候通り、休暇中に通讀すべき書物を三部定めて、朝夕勉强致居候へども、僅かに其の第一册を讀了したるに過ぎず、怠惰か、魯鈍か、我ながら呆れ申候。佐藤氏の兄君、一週間前に歸省、東京高等工業學校の學科より始めて、在京一般學生の生活ぶりなど、色々興味ある談話を承り候。歐洲戰爭前までは、つまらぬ藥品までも外國に仰ぎ候ひしが、戰爭以來輸入杜絶の結果、これまで日本にては出來ぬと思ひ

羨望に堪へず

魯鈍

生活ぶり

杜絶

しものまでも、ずんく製造し得る様に相成、工業の進歩、國産の發達、誠にめざましきものありとの話には、最も人意を強うする様覺え候。諸先生方も、多くは御上京やら、御旅行やらにて寂しく御座候。舊盆も過ぎて秋風の立初むるとかいふ此の頃、相變らずの暑熱には閉口致候。盛岡よりの御通信にて、再會も今しばらくの中にと樂しみ居申候。御返事かたぐ、近況御報まで。不悉。

人意を強うす

不悉

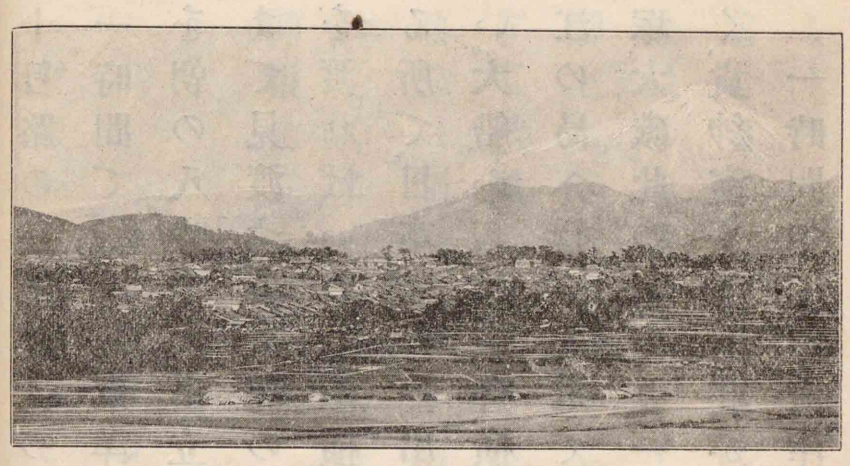
二六　汽車の旅(二)

東京から京都まで、昔ならば江戸からの都上りで、十日路の長旅であつたが、今は急行の下り列車で、十一時間で行ける。東洋第一の大停車場といふ東京驛を朝の八時半に出立、品川のあたりで、遠く安房、上總まで見渡す東京灣の景色を眺めつゝ、やがて六鄕川を渡れば、いつしか「横濱、横濱」と呼ぶ。神奈川縣廳のある所で、日本一の輸出港。さすがは外國人の乘降が多い。大船からは鎌倉、横須賀へ行く支線があり、藤澤は江の島へ行く近道である。馬入川(一)の鐵橋を通つて、平塚(二)、大磯(三)。此のあたり一帶の地は海水浴場として名高く、貴紳、富豪の別莊が多い。

一時間半で國府津(四)に着く。昔の東海道の箱根路を

(一)相模川の一名、甲斐國桂川の下流。
(二)―(四)いづれも相模國。一帶の地

(一)相模國。
(二)Tunnel
(一)駿河國。
雄大崇高



靜岡附近より見たる富士山

通るには、こゝで汽車を下りなければならぬ。汽車は眞直に足柄山に掛つて、山北驛(一)では前後に機關車をつける。トンネル(二)を出ると又トンネル、溪流に架けた鐵橋をいくつともなく越えて、沼津(三)には五分間の停車。

此のあたりの富士の眺の美しさ、雲間に拔けでた雄大崇高な姿は、日本一はおろか、

(一)明和元年來朝せし讀谷山王子朝恒の詠。
(二)(三)いづれも駿河國。
(五)遠江國。
(六)甲斐國に發し駿河灣に入る。
(七)甲斐國白根山に發し駿河灣に入る。
(八)信濃國諏訪湖に發し、遠江國に入りて海に注ぐ。
(九)(十)ともに遠江國。

世界一の名山との感を起さしめる。「人間はゞ如何に答へん言の葉の、及ばぬ富士の雪の白妙。」と其の昔琉(一)球人の詠んだのも、げにとうなづかれる。靜岡(二)は靜岡縣廳の所在地で、德川家には緣の深い所。初代の將軍家康はこゝで死に、最末の將軍慶喜も永らくこゝに退隱して居つた。家康を葬つた久能(三)山は、此の市の東南二里餘にある。

うつの山(四)も、小夜の中山(五)も、今は皆トンネルで通り拔け、富士川(六)も、大井川(七)も、天龍川(八)も、悉く鐵道で樂々と渡る。天龍川を渡つた所が濱松(九)で、濱松から間(十)も無く昔の濱名の湖、今は海とつゞいて居る。江戸時代には

こゝに關所があつたのである。

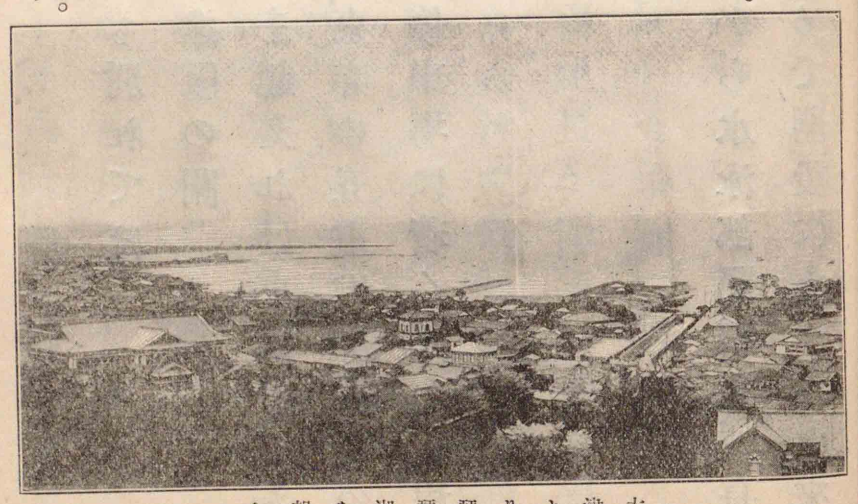
東京から僅か七時間半で武藏、相模、伊豆、駿河、遠江、三河の六國を橫斷して、名古屋に着く。愛知縣廳の所在地で、両京及び大阪に次いでの繁華な都である。汽車の窓から華やかな日に輝く金の鯱が見える。鐵道はこれから北へ折れて岐阜縣に入り、間もなく岐阜(一)に着く。

岐阜はよい處(とこ)金華山の麓といふ其の金華山の麓を流れる長良川は、鵜飼で其の名が世界に聞えて居る。大垣(二)の城を眺めて、關ヶ原(三)を過ぎる時は、誰しも三百年昔の大戰爭(四)を想ひ起す

(一)(三)いづれも美濃國。

(四)慶長五年九月、石田三成と德川家康との戰。

であらう。青葉の中に彦根(一)城の白壁もいかめしく、美しい。米原(二)は北陸線の分岐點。汽車は琵琶湖の南方を走つて、「急(三)がばまはれ」といふ瀨田の橋も左側に見える。俵藤太(四)の射殺した大百足が七卷半卷いたといふ三上山(五)は麗しい山である。大津の停車場からは琵琶湖の遠望がわけて美しい。こゝは滋賀縣廳の在る所。



大津より琵琶湖を望む

(一)(二)ともに近江國。

(三)「ものゝふのやばせの渡近くとも、急がばまはれ瀨田の長橋。」

(四)藤原秀鄕。

(五)琵琶湖の東南に聳ゆ。一名近江富士。

(一)蟬丸の歌。後撰集、百人一首にあり。

(二)眞言宗東寺派の總本山。京都市下京區にあり。延曆十五年桓武天皇の創建。

間も無く、(一)これやこの行くも歸るも別れては
知るも知らぬも逢阪の關

と歌つた逢阪山のトンネルを越えれば京都府である。長い日はやうく暮れて、(二)東寺の五重塔が夕月の光に照される頃、京都の七條停車場に着く。此の行程三百二十九哩。

二七　水泳日記

八月一日　晴　午前九時から水泳部開場式。校長先生のお話があつて、今年始めて開設になつた由來から、水泳の必要、水泳の心得等、色々とお諭しにあづかる。水泳の先生は永井先生で、生徒は總數百二十名、甲乙丙の三組に分れて、甲組長が五年級の齋藤君、乙組長が同じく五年の白石君、丙組長が四年の西村君である。僕は乙種に編入せられた。泳ぐ間は二十分位だが、初めてのせいか、大變に疲れた。

八月二日　晴　僕は少しは泳げるのだが、甲組の人のを見ると、早くあゝ泳げればよいと羨しい。丙組にはまだちつとも泳を知らぬ者も居る。一間位しか泳げぬ者もある。今日は先生から教はつて抜手をやつて見たが、まだ旨く出來ぬ。午後六時から博物の井

上先生がお出でになつて、動物の講話があつた。其の中に、「獸は四足で體を支へ、足を運ばせて歩き走るから、足がよく發達してゐる、即ち足の動物である。鳥は體を空中に浮べて進行するから、翼の發達が著しくて、翼の動物と言つてもよい。魚は主として體の後部を振動かして進行するから、尾は著大である。魚は尾の動物である。」と說かれたことが、如何にも面白く思はれた。

八月三日　晴　甲組では、西瓜取の競爭があつた。今日も扳手を試みたが、昨日よりはよく出來るやうになつた。冲に汽船の通るのが二艘見えた。六時頃大夕立。

八月四日　晴　乙組の競泳があつて、大分よく出來ると、先生から褒められた。

八月五日　晴　午後の講話に、水中の馬術に就いての御話があつた。馬に乘つて水を渡る時には、馬の尻の方に乘つて、手綱をしつかり持つて、馬を自由に泳がせるのであるさうな。さうして、馬の首を上げさせて、泳いで行く方向を間違はせない樣にするのが、肝心であるとの事である。先生のお話に、(一)明智左馬介は湖水(二)の淺い所を渡つたのであらう。宇治川の先陣も、淺いからさうむづかしくは無かつたらうと言は

肝心
(一)光春。一に光俊。光秀の從弟。
(二)琵琶湖。

れた。

八月六日　雨で水泳はお休。みんなで五目ならべをして遊んだ。

八月七日　晴　乙組で腹を下したものが三人。甲組の立泳が面白かつた。

八月八日　晴　扳手が次第に上手になつて、面白くてたまらない。長時間泳いでも餘り疲れないやうになつた。

八月九日　晴　水泳中、先生が脇に來られて、大分上手になつたから、來年は甲組にはいれるだらうとおつしやつた。

八月十日　晴　閉場式があつて、一同煎餅をいただいた。僕は樂しい十日間を夢のやうに過して、短過ぎるやうに思つた。しばらくの間に、皮膚の色は眞黑になつた目方も餘程殖えたに違ない。

二八　座右の銘

中根東里

一、父母をいとほしみ、兄弟に睦じくするは、身を修むる本なり。本かたければ末しげし。

一、老を敬ひ、幼をいつくしみ、有德を貴び、無能を憐む。

一、忠臣は國あることを知りて、家あることを知ら

ず。孝子は親あることを知りて、己あることを知らず。

一、祖先の祭をつゝしみ、子孫の教をゆるかせにせず。

一、辭は中るべくして誠ならんことを願ひ、行は敏くして厚からんことを欲す。

一、善を見ては法とし、不善を見ては誡とす。

一、怒に難を思へば悔にいたらず。欲に義を思へば耻をとらず。

一、儉より奢に移ることは易く、奢より儉に入ることは難し。

他山の石

一、樵夫は山に入り、漁夫は海に浮ぶ。人各其の業を樂しむべし。

一、人の過をいはず。我が功に誇らず。

一、病は口より入るもの多し。禍は口より出づるもの少からず。

一、施して報を願はず。受けて恩を忘れず。

一、他山の石は玉を磨くべし。憂患のことは心を磨くべし。

一、水を飲んで樂しむものあり。錦を衣て憂ふるものあり。

一、出づる月を待つべし。散る花を追ふこと勿れ。

一、忠言は耳にさかひ、良藥は口に苦し。

——東里外集——

二九　春夏秋冬

(一)

空も霞みて、遠山の
櫻花さく　永き日に、
囀る鳥の　聲聞けば、
春の喜　果もなし。
柳の　綠、　菜の花の
文織る野邊に　旅寢して、

(一)「照りもせず曇りも果てぬ春の夜の、朧月夜にしくものぞなき。」（新古今集、大江千里）

風情

いさゝ小川

(一)曇りも果てず　照りもせぬ
月を見ること　嬉しけれ。

(二)

子規鳴く　森かげに、
卯の花白く　咲出づる
夏の朝の　ながめこそ、
春にもまして　風情あれ。
晝の暑さを　行く水に
流して庭の　夕涼、
いさゝ小川の　水の面を、
螢飛ぶこそ　嬉しけれ。

(一)「秋來ぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬる。」（古今集、藤原敏行）

(二)「白露をこぼさぬ萩のうねりかな。」（芭蕉）

(三)

いつか夏去り
目にはさやかに
風の音にも
籠りて秋は
萩のうねりに
命とたのみ
聲も更行く
書を讀むこそ

(四)

林まばらに
葉は落ちて、
秋來ぬと、
見えねども、
靜けさの
物寂し。
散る露を、
鳴く蟲の
夜半の窓、
嬉しけれ。

水あす

寒げに見ゆる
裏の大川
橋の脚いと
雪降積る

そだ

圍爐裏にそだを
親はらからの
語り合ふこそ

鳥の宿、
水あせて、
高きかな。
家の外、
さしくべて、
永き夜を
嬉しけれ。

風致

三〇　鳥の美

飯島魁

風致といふものは、單に山の形、水の姿、それに美しい色彩の美を與へて居る植物ばかりで組成せられ

て居るのでは無い。山容水態如何に麗しく、綠樹彩花如何に美しくとも、其の間に動く何物かが無ければ、風景は生きた趣を生ぜぬ。

山容水態

昔から花鳥といふ。文學、繪畫、彫刻、音樂あらゆる藝術には、花と鳥とが重要な題材とせられて居る。殊に吾が邦の繪畫や、詩歌には、花と鳥とが主要な地位を占め、其の中から花鳥を除き去つたなら、非常に貧弱なものと成つてしまふ。

藝術
題材

わが宿の池の藤波咲きにけり
山時鳥いつか來鳴かん

(一)古今集の歌。讀人しらず。

といふ通り、花だけ、鳥だけでは單調である。花に鳥を

單調

あしらふ

あしらひ、鳥に花を結びつけて、始めて複雜な美が成立する。「梅に鶯」、「卯花に杜鵑」、「蘆の花に雁」といふ風に、四季それ〴〵の花には鳥が附屬物となつて居る。

獨り鳥のみならず、あらゆる動物は、皆かく風致に美を加へて居る。禽獸蟲魚は昔からの畫題であり、詩材である。(一)春日野から鹿を奪ひ、(二)武藏野から蟲を除いたならば、其の春の旦、秋の夕の景色は、どれだけ無味なものと成るであらう。それ程に美觀上の價値のあるものを、人間が勝手氣儘に捕殺する權利をもつて居るであらうか。吾々が擅に鳥獸の命を絕つ其の結果はどうであらう。五年の後、十年の後、更に二十年、三

(一)奈良春日山の麓。
(二)武藏國の大平原。

十年の後には、吾々の見た美しい鳥も、珍しい獸も皆姿を隱して、吾々の子孫はそれを見ることが出來なくなりはすまいか。「(一)鶯の笠に縫ふてふ梅の花」とあるが、鶯はどんな鳥であらうといふやうなことに成るかも知れぬ。かうなればゆゝしい一大問題である。吾々は吾々の見た鳥や獸を、やはり子孫に殘して、子孫にも樂しませて遣りたく思ふ。

これは誇大の言では無い、日本の鳥類は今將に全滅せんとしつゝある。去年と今年とを比べて、其の間の差異を發見することは困難である。併し今と十年前、二十年前と比べても、其の間に非常な差異のある

(一)「鶯の笠に縫ふてふ梅の花、折りてかざさん老かくるやと。」(古今集、東三條左大臣)

ゆゝしい

感知　過去を以て將來を推す現象

歷史的になる

ことを何人も感知するであらう。過去の變化を以て將來を推せば、十年後、二十年後にどういふ現象を呈するであらうか、今から豫め想像するに難く無い。廣い世界の目から觀れば、滅亡した動物は無數である。狹い日本だけで觀察しても、既に滅亡して歷史的になつたものが、いくらもあるのである。

諸君は美しい桃花鳥色の色彩を知つてゐるであらう。併し今は桃花鳥色こそあれ、其の色に此の名を負はせた朱鷺といふ鳥は居ない。桃花鳥色とは、其の色が朱鷺の羽色に似てゐるから名づけられた名前であるが、此の鳥はもはや全滅して、其の姿を見るこ

とが出來ない。蘆田鶴の千代呼ばふといはれた江戸の千代田城は勿論、江戸附近には多く鶴が居たものであるのに、維新後は其の影をだに見ることが出來なくなつた。鶴も昔は澤山居た。(一)淺草の觀音へ行く子供は、皆鶴が見られるといつて喜んだものである。築地と淺草の両本願寺、それに本所の(二)五百羅漢の屋根の上には、うよ〳〵する程澤山鶴が居たが、此の鳥は今ははや全國一般に居なくなつた。鷺の減つたことも夥しいもので、昔は到る處の水田に水鏡を映して、思案投首の白鷺を見ることが出來たが、今日では御獵場以外に多く之を見ることは無い。これはほんの

(一)金龍山淺草寺。
(二)今なし。
うよ〳〵する程
思案投首

二三の例である。此の他あらゆる鳥類は、日本から姿を隱さうとして居るのである。まことに風致の上から觀て、ゆゝしい一大問題では無いか。

三一　天の橋立

幸田露伴

天やゝ曇りたれど、(一)橋立一覽の念勃々として止め難ければ、小舟を僦ひて、朝はやく宮津の客舍を出で、鏡の如くなる江上を、ゆらく〳〵と漕行く。舟は小なれど、苫をかけ、毛氈を布きなどして、火入まで備へたれば、乘心地いとよし。濱邊に櫂を立てゝ網を干したる樣の、恰も畫の如くなる漁村を左に眺めつゝ、漸く松

(一)丹後國宮津灣の西北岸より東南に突出する沙嘴。長さ二十七町餘。
勃々
客舍
ゆらく〳〵と
松影婆娑

(一)國幣中社。

三景の一たるに耻ぢず

萬頃の波光に映ず

影の婆娑たる長洲に沿ひ、北に向ひて進む。

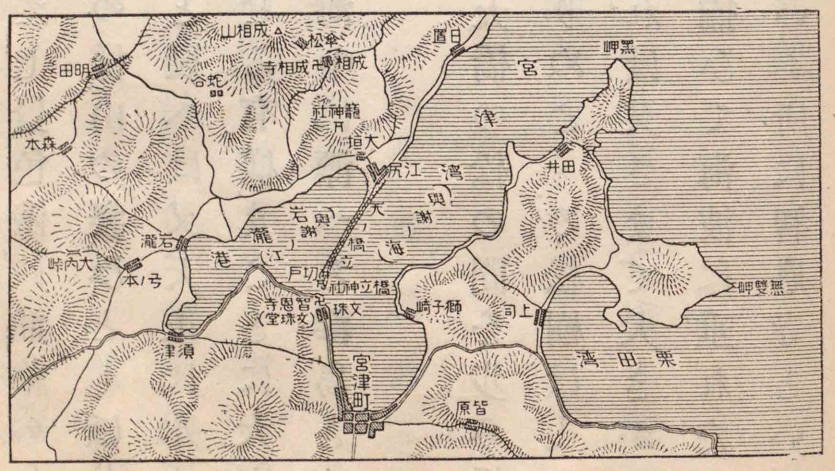
舟子の語り出づる様々の名所話に耳を傾けつゝ、漕行く程に、やがて籠(こも)神社の前に着きぬ。社前に茶店あり。しばしそこに憩ひて、下駄をば藁草履にはき換へ、直ちに成相山に登る。路は嶮しけれど、苦しき程にもあらず。右に折れ、左に曲り、上り上りて、傘松の下に至り、首を回らして望めば、眼前の好風景まことに日本三景の一たるに耻ぢず。與謝の江、與謝の海を劃れる白沙青松は、恰も浮べるが如く、六里の翠色、遠く萬頃の波光に映じたる様、畫にも寫し難く、筆にもあらはし難し。岩瀧の村、芳野の山、九世の文殊堂は近く前

賤が家の煙

詩趣

にありて、黒崎の鼻は遠く左にあり。釣する海士の小舟、立ちのぼる賤が家の煙、いづれも詩趣ありて、おもしろきこといふべからず。

さて天の橋立股眼鏡とかいひて、こゝに登りて眺望する者は皆かくして見るといへば、我もをかしさを忍びて、全景に背を向け、身を屈め、頭を垂れて股の間より覗き見



れば、不思議や、今まで淡く見えし景色俄に油繪の如く、パノラマ[1]の如くなりて、水の樣、山の姿、ひとしほ其の趣を添へ、水中に天あるかと疑へば、又天上に水あるが如く、長橋の其の間に架せる有樣、まことに大空に立てる虹ともいふべく、又海中に漂へる浮島ともいふべきなり。

[1] Panorama.

成相山より下りて、ひとり天橋の松の間を歩み、橋立明神の所よりまた舟に上りぬ。こゝの松樹は丈の長短不揃にて、老いたるもあれば、又さまで大きからざるもあれど、下枝は皆よく揃ひて海波に垂れたる景色殊におもしろし。切戸といふ所に智恩寺といふ小寺あり。山門も、塔も、本堂も建築みな古雅にしてゆかし。

古雅

かくて龍燈の松、涙が磯などいふ名所を横に眺めつゝ、夕暮の程にまた宮津に歸りぬ。

―枕頭山水―

三二　一燈錢

久坂義助

此の度同社中申しあはせ、自分々々の力を盡し、骨を折りて、瑣細の事ながらも相儲け置きたき事に候。非常の變、不意の急にさし懸り候はんにも、嚢中拂底にては差支ふるものに候。有志の人の、牢獄に繫がれ、又は飢渴に迫り候ものも、おひ〳〵相助けたく、義士、

拂底

節婦の碑を立て墓を築く等にも力を盡し、手を伸したき事に候へども、同社中、有餘りの金もあるまじき事に候へば、毎月寫本なりとして、僅かの貯蓄致し置きたく、月末、松下塾まで銘々持寄り致すべく候。半年にもせよ、一年にもせよ、塵も積れば山となる理にて、きつと他日の用に相立つべく考へられ候。尤も同社中、身の膏を搾り出して集むる事なれば、迂濶に費すべきにあらず。已むを得ざることあらば、同社中申しあはせの上にて、取揃へ申すべく候。抑、人を救ふも、用に備ふるも、富貴長者の身ならば、なほ如何樣にも相計らふべけれど、我々にては、かくまでにするは、貧者の一燈とも申すべき事に候。至誠の貫かぬ理はよもあるまじく候。これに依つて、此の度取立て候金を、一燈錢とは名付くるにて候。

一、毎月寫本六十枚づつ、村塾まで必ず持寄るべく候事。

一、寫本料は先師(一)の定むる所、眞字十行二十五字五文、片假名同斷四文の事。

一、一日僅かに二枚づつの事なれば、さまで勉强のならぬ事はあるまじ。もし此の枚數不足の時は、代を以て相償ひ、必ず持寄りこれあるべき事。

右の條々此の度申しあはせ候。これしきの事に骨を

(一)吉田松陰のこと。長州藩士にして、幕末の志士。

惜しみ候程にては、我々の至誠貫き候こともおぼつかなく候やう相考へられ候。銘々きつと忘らぬやう致したき事は申すもおろかに候。以上。

三三　少時讀書の三利

貝原益軒

少時は讀書に三利あり。氣力強く、多讀して倦むことなし、一なり。暇多く妨なくして多讀し易し、二なり。年少く氣盛なれば、記憶強くして諳んじ易し、三なり。年長ずるに及びては讀書に三不利あり。一には、已に君に事へて掌ることあり、人と交繁く家事も多くして暇なし。二には、年漸く長ずれば氣力減じて多讀し難し。三には、三十以後、年々に氣性減じ、少年の時一回讀みて記憶することも、年長ずれば十回讀めども記せず。されば書は幼少の時に讀むべし。

三四　明治天皇の御遺物を拜す　其の一

笠井信一

(一)先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰せ出されましたので、定時に參内致しましたところが、十一時過權殿參拜を許されました。權殿と申すは、崩御の後、一年間皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。即ち私共は此の度、先帝の皇靈を拜

(一)大正二年一月。

する特別の御恩典にあづかつたのでございます。そこで私共は長い廣い御廊下に整列致しまして、宮殿奥深く權殿に詣つて、一人づつ最敬禮を致しました。

霊感

蓋し其の瞬間は、何人と雖も一種の霊感に撃たれないものは無かつたでございませう。其の權殿と申すは、平素皇后陛下の謁見所たる桐の間を以て、之に充てさせられたのでございました。

萬機の政親裁

それから更に奥殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁遊ばされる處でございます。先帝には永くこゝに在らせられて、德教を御布きになり、大憲

膺懲の師宏謨雄圖

を御定めになり、或は國交を御修め遊ばされ、時に或は膺懲の師を起させられる等、宏謨雄圖一に此の中で御定め遊ばされたのでございます。然らばどんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外なことで、平常私共が參内の節、休息を許される御部屋の方が却つて遙に御立派である。しかも、あまり廣く無い二間續の御部屋であつて、瀟洒たる檜の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばされて無い。御机も、御椅子も、實に御質素なもので、絨毯の如きは當初敷れた儘のもの故、後には色も大分褪めて參りましたので、侍臣から御取替を屢〻願ひ出ましたが、御許が無

瀟洒

くて、遂に今日に至つたのださうでございます。

御部屋は三方壁を以て廻らし、南の一方に硝子戸があり、御机は御座所の中央に、南向に御据ゑになつてあります。此の御構造を拜觀すると同時に、夏分は嘸御暑いことでいらせられたらうと感じましたが、先帝には御暑さの御厭も無く、連日此處に出御あらせられたのでございます。之につけても、年々に思ひやれども山水をくみて遊ばんと夏なかりけり

の御製を想ひ起して、誠に恐懼に堪へませんでした。それのみならず、此の御部屋にはストーブの御設が

恐懼に堪へず

(一) Stove.

ございますけれども、(一)三十七年の冬以來、御用ひが無いひそかに承るに、其の年の冬の或朝、例の如くストーブに火が焚いてございましたが、先帝が出御遊ばすや否や、「火を消せ。」と仰せられる。侍從は何故か分りませんが、唯仰の儘に火を消しましたさて其の後と申すものは、如何なる酷寒と雖も、一切ストーブの御使用を御許し遊ばされなかつたとの事でございます。これは勿論大御心の程を伺ひ奉るわけには參りませんが、侍從方の推測し奉る所では、當時皇軍が滿洲の野に大敵と戰ひ、飢寒に苦しんでゐるのに御同情を垂れさせられ、兵士と艱難を共にせんとの大御

(一) 明治三十七年。

心に出でさせられた次第であらうと申すことでございます。それ以來は、唯一個の小さい丸火鉢のみを御使用遊ばされたとの御事。今其の御火鉢を拜觀するにつけても、思ひ出されるのは、斯民の上を思ひやらせられた御製、

桐火桶かきなでながら思ふかな
すきまおほかる賤が伏屋を

斯民

でございます。

三五　明治天皇の御遺物を拜す　其の二

此の御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されました。此の御部屋には、先帝の御學問所で御使用になつた御遺物全部、其の儘に据置かれてございます。是は今上天皇陛下の大御心に出でさせられた趣に拜承致しました。構造も、方向も、廣さも、御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も、昨年七月十三日、即ち先帝最後の出御當時の儘に、御備附になつてございました。床の間には其の當時の御軸物が掛けてあり、其の前方には、御劒數振横たはり、御机は中央に南面してございます。先帝御在世の折は、我等如き者が御机に接近するなどは思ひも寄らぬことでございますが、今回は特に御許を蒙つて、仔細に拜觀

思ひも寄らぬ

Table.

する光榮を得ました。

まづ御机は羅紗を鏡張にしたテーブル(一)で、中程に焼痕がございます。是は先帝が御煙草を召上つていらせられた節、臣下より政務を言上致しました處、先帝には御吸ひかけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聽取あらせられた折、煙草が墜ちて此の焼痕がついたのだと申すことでございます。さて此の焼痕のあるテーブルの羅紗を御取換へ申し上げんがため、幾度か願ひ出ましたけれども、斷じて御許が無かつたとの御事。蓋し何物でもそれにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる御儉

儉德の至

禿ぶ

Ink.

德の至と拜察し奉ります。

御硯箱は、明治二十年に鹿兒島縣から御取寄せになつた竹製の品でございます。其の中の筆は普通の御品で、我等臣下の日常用ひる物とかはらないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えない程に御使ひふるしに成り、墨も亦同樣で、一寸位に磨りへらされた品もございました。鋏も同じく普通市場にある品で、其の傍に、學校生徒等の用ひる普通のインキ(一)がございました。最初は、侍從の方が何かの調に用ひた儘、其處に置忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常御用ひになつたものだと承つて、今更な

慙愧に堪へず

から御儉德の高きに感激し、自ら顧て慙愧に堪へなかつた次第でございます。

御椅子の下に獅子の毛皮が敷いてございます。これは青山御所において遊ばされた頃から、久しく御使用になつたもので、毛も次第に磨りきれ、皮も遂に破れるやうになりました。そこで御取換を願ひ出ましたが、「なに、宜しい。」とて、御許が無い。せめて御修理をと願ひ出て、漸く御許を得た。併し適當の皮が無いことを言上致しましたところ、何の皮でも宜しいとの思召であつたので、赤犬の皮を以て補足したと申すことで、侍從が「此の邊が犬の皮です。」と說明して居られました。

(一) White Shirt.
(二) Boarol.

其の傍にホワイト・シャツを入れる白いボール箱やうのものが澤山積重ねてございましたから、「何に遊ばすものか。」と侍從に尋ねましたところ、やはりシャツの空箱であるが、書類を入れるに便利であるとて、御手許に留置かせられたのであるとの事でございました。

裁可

名を署す

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れ、表に主務者の名を署して上るのださうですが、御親裁の後は、別の紙袋に入れて御下げになる。そして御不用になつた前の紙袋は、一枚たりとも御棄て遊ば

隨時

用ひるに其の途を以てす

反故

費目

されず、隨時御詠出の御製を御認めになる御詠草に御用ひになりました。それを御側の方が別紙に拜寫して、御歌所に御廻し申したのでございます。實に天下の物は用ひるに其の途を以てすれば、一つとして無用の物は無い。先帝はかく萬機の政を聞し召されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

又傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は、務めて御節約相成り、聊かにても冗費をば御省き遊ばしたと申す事でございます。

一天萬乘の君

一天萬乘の大君におはしましながら、禿びた御筆を御用ひになり、破れた敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召でいらせられませうか。皆是、節すべきを節して、有用の事にのみ御用ひ遊ばさうといふ大御心に外ならぬ事と存じます。

御次の間には、造花や、彫刻や、種々な御品が備へてございました。之を拜見いたしまするに、學校や展覽會等に行幸の節、御奬勵の爲御持歸り、又は御買上にならせられたもので、御裝飾の御目的とは考へられません。それ故に、造花の如きも格別のもので無く、何年前のものか、色も褪めはてゝ、殆ど裝飾の用を爲さ

道樂

ぬものまで、其の儘になつてございます。其の他美術工藝品の御買上も、皆御奬勵の爲で、俗人の道樂とは全く趣を異にしていらせられます。御製に、

千よろづの民と偕にも樂しむに
　ます樂みはあらじとぞ思ふ

とございますが、實に此のやうな御樂みを求めさせられんが爲、先帝には長い年月の間、大いなる御苦心を遊ばされたのでございます。

御心づくし隆々として興る

今や我が國運は、先帝の長き御心づくしの御蔭を以て、隆々として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧れば我等は長い間、聖天子御一人に、非常な御苦勞をお掛け申し上げましたのでございます。こに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に

國民の力のかぎり盡すこそ
　わが日の本のかためなりけれ

服膺公人

の御製をも同時に服膺して、公人としても、私人としても、力のあらん限りを盡し、以て「我が日の本のかため」のため、應分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓ふ次第でございます。

應分の貢獻

—嚴手學事彙報—

(一)神武天皇以前の世。

○別天神(五代)
○天神七代
○地神五代

伊弉諾尊
伊弉冊尊
大日靈貴尊(天照大神)
素盞嗚尊
天忍穗耳尊
彦火瓊々杵尊
彦火々出見尊
鵜茅葺不合尊
神武天皇

自讀文

一　山の幸海の幸

坪内逍遙

(一)神代の昔、彦火闌降尊、彦火火出見尊といふ兄弟の神があつた。兄の尊は漁業が上手なので、海の幸彦と呼ばれ、弟の尊は獵が得意なので、山の幸彦と呼ばれ、長い年月、海と山とに別れて業を勵み、たゞの一日も怠ることは無かつた。

或日、弟の尊は兄の尊に向つて、「何と兄上、かうして長い間同じ事ばかりも氣が疲れます。一日だけ仕事を取換へ、あなたは山で獸を狩り、私は海で魚を釣つたらばどうでせう。」といふと、兄の尊も、「それはめづらしくて面白からう。」と賛成し、互に其の場で道具を取換へ、兄は弓矢を、弟は釣竿を携へて、山と海とへ出かけて行つた。

慣れぬ事は仕方の無いもの、弓矢を取つては及ぶ者もない弟の尊も、一日か

かつて小魚一疋釣れぬのみか、兄の尊から借りて來た大切な鈎さへ、いつの間にか落してしまつた。

「さあ、大變な事をした。」とうろたへてゐる所へ、兄の尊が山からの歸りがけ、これも慣れぬ仕事に何一つ獲物なく、大不機嫌の樣子で、「弟、何をしてゐる。」と聲をかけたので、弟の尊は是非なく其の譯を話すと、兄の尊は火の樣になつて腹を立て、どう詫びても聽入れず、「鈎を返さぬうちは、此の弓矢は返さぬ。」と言張つて、とめる袖を振拂ひ、先に立つて歸つてしまつた。兄の腹立も尤もと思つて、弟の尊は、自身が秘藏の劒を碎き、それで鈎を五百こしらへて償としたが、片意地な兄の尊は、「どうあつても、もとのでなくては勘辨せぬ。」といふ。

弟の尊は困つて、どうしたらなくした鈎が手に入らうかと、毎日濱邊をぶらついてゐると、或日一人の翁が現れ、「私は鹽土翁と申す此の邊の者でございます。何程お搜しなされても、鈎は此の邊にはございますまい。龍宮へお越しになつて、海のぬしに御相談なされたがよう御座りませう。」といふ。尊は大きに喜び、「そしてどうしたら龍宮へ行かれようか。」と尋ねると、「それは私が心得てをります。」と言つて、無目籠といふ竹で編んだ小舟のやうな籠を持つて來て、「さあ、これにお乘りなされ。」といふ。それに乘ると、不思議や、籠は波の上を矢の如くに走り、いつの間にか龍宮らしい處に着いた。

瑠璃の瓦、瑪瑙の門、貝の敷石など、きら〳〵と美しく、門の前には大きな樹があり、其の下には清らかな井筒があつた。

案内を請うても誰も出て來ぬので、尊は樹の上に登つて枝に腰掛けてゐると、瑪瑙の門の内から二人の女が出て來て、井筒に立寄り、やがて黃金の釣瓶で水を汲まうとて覗くとたんに、尊の顏の水に映つてゐるのを見つけたぴつくりして見上げると、尊は徐に樹から降りて、「驚き給ふには及ばぬ。私は日本國から、しか〴〵の譯があつて參つたもの。こゝのあるじの君にあはせてもらひたい。」といひつゝ、頸に懸けてゐた曲玉を一つ外して姫に渡す。姫達は、「さては日の本の天孫でいらせられますか。私共は龍神の女でございます。」と言つて、すぐに尊を門の内へと導いた。

さて龍神に對面の上、更にくはしく譯を話すと、龍神は深く同情して、早速部

秘藏　大事にしておく。
片意地　つむじまがり。
瑠璃　青色の寶石。
瑪瑙　寶石の一種。
井筒　井戸。
曲玉　古代の人の身の飾にしたの玉。
天孫　天照大神の子孫。

詮議とりしらべ。

餞別旅立つ人にやる贈物。

下の魚どもを悉く喚集め、もしや彼の鈎をば呑んで居るものはないかと、一々詮議に取りかゝつた。多數の魚どもの事とて、最初は手がかりがつきさうにもなかつたが、やつとの事で、ある鯛が呑んでゐる事がわかつたので、速に鈎をぬき取つて尊に奉つた。

目的の鈎が手に入つた上は、尊はすぐにも歸りたかつたが、龍神父子がとめるのでさうもならず、暫く逗留して居るうちに、月日の立つのは早いもので、いつの間にか三年も過ぎた。龍神のもてなしは行屆いて、此の上もなく樂しい事ばかりであつたが、尊は兄の尊との約束が氣になるので、遂に龍神父子に別を告げて、日本へ歸らうとした。

龍宮の人々は別を惜しみ、中にも二人の姫は銘々一つの寶玉を持出で、「之は潮滿珠、潮干珠と申します。潮滿珠を額にあてゝ祈れば、いつでも大海の潮を呼び、又潮干珠で祈れば、いつでも潮が干てしまふ定め。之を御餞別のしるしに。」と言つて尊にさしあげた。尊は大いに悅び、それを懷中して龍宮を出ると、龍神のいひつけで、八尋の大鰐がそこに待つてゐて、尊を乘せて大海を電の樣に走り、

奇端不思議なること。

威德威光と德風。

忽ちのうちに日本に着いた。尊は着くとすぐに兄の尊を尋ねて鈎を渡した。

兄の尊は鈎の事を言ひがかりに、弟の尊を逐出して、獨りで我が儘に世を渡らうと思つてゐたところ、あてが外れたので、ます〳〵弟を惡み、遂にはよしない考を起し、或日惡者共をかたらひ、弟の尊が一人で野を歩いてゐるところを、後から不意にかゝつて打殺さうとした。弟の尊はふと思ひついて、彼の潮滿珠を懷中から取出して額にあてると、不思議や、あたりは一面の大海となつて、兄の尊を始め惡者共は盡く溺れ苦しみ、「赦してくれ、赦してくれ。」と叫んだので、今度は潮干珠を出して前の通りにすると、見る〳〵潮は引いてしまつた。

此の怪しい奇端に、兄の尊は怖れ戰き、かくまで威德ある弟を殺さうとしたのは惡かつたと、深く後悔せられたので、弟の尊は大きに喜び、それより後は、兄弟心を合せて世の中を治める事に力をお盡しになつたといふ。——中學新讀本——

二　犬ころ

長谷川四迷(一)

嬉しいにつけ、悲しいにつけ、憶ひ出すのはポチの事だ。春雨のしと〳〵と降

(一)小說家。名は辰之助、二葉亭と號した。明治四十二年歿。年四十六。

る薄ら寒い或夜のことであつた。私は例の通り、宵の口から寝てしまつたが、ふと目をさますと、耳元近くに妙な音がする。ごうといふかとすればすうと、或は高く、或は低く、單調ながら拍子を取つて、さながら、大鋸で大丸太を挽割る樣な音だ。私は夜中に滅多に目を覺したことが無いから、初はびつくりしたが、能く研究して見ると、なに父の鼾なので、やつと安心して其の儘再び眠らうとしたがどうもこれが耳に附いて寝附かれない。仕方がないから、聞えるまゝに其の音に聽入つてゐると、何時からとなく囃子の手が込んで來て、合の手に、遠くでかすかにきやん〳〵といふやうな音が聞える。鼾が凄じい時には、それに氣壓れて聞えぬが、鼾が低くなると、判然と手に取るやうに聞える。不思議に思つて益〻耳を澄してゐると、次第に大きく、高くなつて、遂には鼾と離れ〴〵に、確かに門前に聞える。

合の手　歌と歌との間にひく音曲。

かうなつて見ると、疑もなく小狗の啼聲だ。時々喉でも締められる樣に、けたたましく、きやん〳〵と啼立てる。其の聲尻がやがて段々に細く悲しげになつて、めいるやうに遠い〳〵處へ消えて行く。——かとすれば、忽ちまた近くで、堪へきれぬやうに啼出して、くん〳〵と鼻を鳴すやうな時もあり、ぎやおと欠伸をするやうな時もある。

けたゝましく　とんきやうに。

めいる　しづみ込む。

私はそつと夜着の中から首を出して、「小さい狗の聲だねえ。どうしたんだらう。」と、うるさく母にきくと、母はやさしく、「何處かの人が棄てた狗であらう。」と、一一說明してくれて、「もう晩いから默つてお寝。」と、あちらを向いてしまつた。

私も亦夜着をかぶつた。狗は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるにつれて、父の鼾が又うるさく耳に附く。寝られぬ儘に、私は夜着の中で棄狗の有樣を繰返し繰返し考へた。まづ何處かの飼犬が、緣の下で兒を生んだとする。ちつぼけなむく〳〵したのが重り合つて、首を擡げて乳房を探してゐる所へ、親犬が餘所から歸つて來て、其の側へごさりと横になり、片端から抱へ込んで舐めると、小さいから、舌の先でたわいもなくころ〳〵と轉がされる。轉がされては大騷して起返り、又よちよち〳〵と這つて、ぽつちりと黑い鼻面で、お腹を探り廻り、漸く思ふ柔な乳首を探り當て、あわてゝ吸附いて、小さな両手で揉立て〳〵吸出すと、甘い溫な乳汁が出て來て、喉へ流れ込み、胸を下つて、何ともいへずおいしい。

お腹もくちくなる　滿腹になる。

いたいけ　幼くかはいさう。

と、脇のしたから、まだ乳首にあり附かぬ兄弟が、鼻づらで割込んで來る。取られまいとして產毛の生えた腕を突張り、大騷をやつてみるが、とう〳〵取られてしまひ、又そこらを尋ねて他の乳首に吸附く。其のうちにお腹もくちくなり、親の肌で身體も溫まつて、とろけさうな好い心持になり、つい、うと〳〵となると、含んだ乳首が脫けさうになる。夢心地にもあわてゝ又吸附いて、一しきり吸立てるが、ぢきに又たわいなくうと〳〵となつて、乳首が遂に口を脫ける。脫けるも知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體が無い。其の時忽ち暗闇から大きな腕がぬつと出て、正體なく寐入つてゐる所をむづと掴み、宙に吊す。驚いて目をぱつちりあけ、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つてもがく中に、頭から何かで包まれたやうで眞暗になる。窮屈で息が塞がりさうだから、出ようとするが出られない。暫くもがいて居る中に、ふと足搔が自由になると、領元を撮まれて、高い高い處からどさりと落された。うろ〳〵としてそこらを視まはすけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で、誰も居ない。ぼんやりとしてゐると、雨にうたれて、見る間に濡れしよぼたれ、おそろしく寒くなる。身

うんざりする　よわり切る。

慄一つして、くん〳〵と親を呼んで見るが、何處からも出ては來ない。途方にくれて、よち〳〵と這出し、夜中に唯ひとり、溫な親の乳房を慕つて悲しげに啼きまはる聲が、さつき一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行つたやうだつたが、それが何時か又戻つて來て、何處をどうもぐり込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

私はたまらなくなつて、母に賴んで、此の小狗に食物を與へて、一晩泊めてやることにした。犬嫌の父は、泊めた其の夜を啼きあかされると、うんざりしてしまつて、あくる日は是非逐出すといひ出したから、私は小狗を抱いて逃げまはつて、どうしても放さなかつた。父は困つた顏をしてゐたが、併しこれも一時のことで、其の中に小狗も獨寢に慣れて、夜も啼かなくなる。逐出す筈のものに、何時しかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと、父までが一緒に搜すやうになつてしまつた。

——平　凡——

凱旋道路　二重橋前より東に通ずる大道。明治三十七八年戰役凱旋記念道路。

常磐の影　四時に變らぬ松の綠の水にうつる影。

御不豫　御病氣。

諒闇　天皇がおかくれになつて、臣民一般が喪に居ること。

三　東京だより

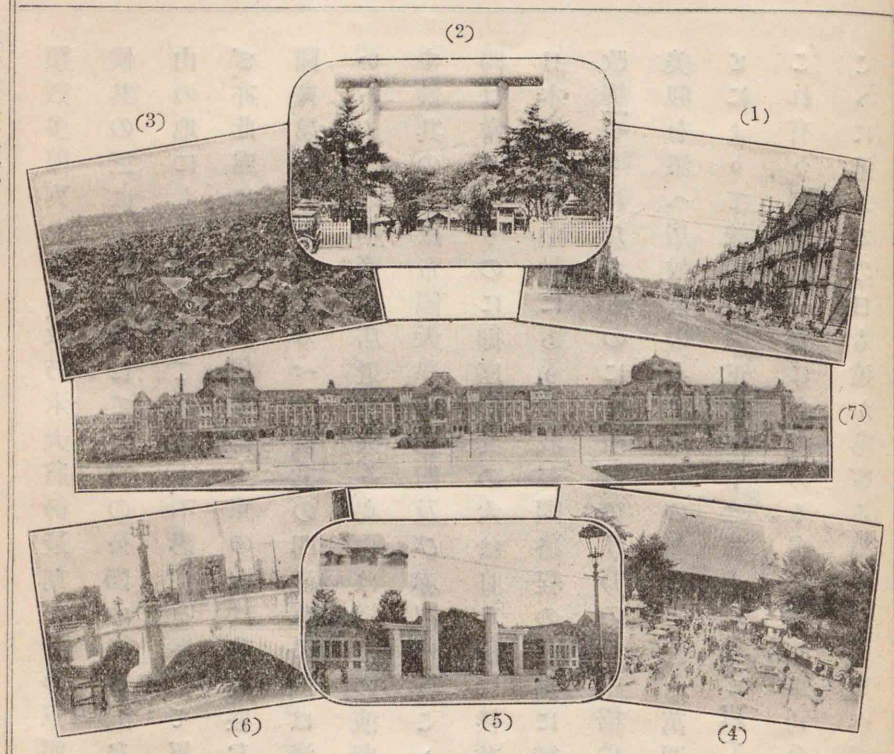
拜啓。其の後は意外の御無音に打過ぎ、多罪此の事に候。御起居如何に候や。貴兄は平生より十分實力の養成に力められ候事とて、別段御心配もこれ無く、至極御氣樂とは拜察仕候へども、追々學年末に差迫り、何かと御多忙と存候。小生幸に壯健にて、日々通學致居候間、御安心下され度候。

偖先般の御音信によれば、三月末には御尊父樣と御同道にて御上京相成候由、久々にて御快談承りたく、鶴首御待申上候。別封の繪葉書は、何れも御同道御案內仕るべき名所にて、是非御上京思し召し立たれ候樣にと御目にかけ申候。

其の一は宮城前丸の內の凱旋道路に御座候。凱旋道路を通じて彼方に宮城の崇嚴を仰ぐべく候。宮城は舊江戶城西丸のありし處にて、四周の濠は名にしおふ千代の老松綠濃やかに常磐の影をうつし、眞に皇城の神聖を感ぜしめ候。かしこくも先帝御不豫の際は、陛下の赤子眞心をこめて御平癒を此の橋邊に祈り奉りたるかひなく、崩御の後、世は諒闇に相成、萬民悲嘆の中に一年を過し

大內山宮城の大庭

榮ゆく御代榮えて行く御治世。



(1)宮城前凱旋記念道路　(2)靖國神社　(3)上野公園不忍池　(4)淺草觀音堂
(5)帝國大學正門及び赤門　(6)日本橋　(7)東京停車場

候ところ、間も無く昭憲皇太后の崩御に會ひ、大內山の松が枝も再び愁雲に鎖され候へども、今や今上天皇陛下御即位の大典を擧げさせられ、松風長閑に榮ゆく御代の萬歲を祝し居候。其の二は靖國神社にて、招魂祭の賑は非常なるものに御座候。春の祭は四月二十九日より三日間に御座候。又神社に隣れる遊就館には、古今の武器

類數多陳列せられ、故乃木大將御最期の時の軍服、同夫人の裝束なども之あり候。其の三は上野公園にて、東京の公園中の最大なるものに候。こゝは古の東叡山の地にして、寛永寺これあり、不忍池を擁して風景よろしく、博物館、動物園など、亦此處に設けられ居候。御上京の頃は花も盛なるべく候へば、緩々遊覽致し、圖書館にも御伴仕るべく候。其の四淺草公園は淺草觀音堂の在る處、仲見世はいろ〳〵の物賣る店道を夾み、奥山は樣々の演戯場棟を列べて、雜沓一方ならず候。其の五は帝國大學の正門及び赤門に候。こゝは昔の加賀屋敷にて、其の赤門は當時のものに御座候。其の六は日本橋に候。其の位置市内商業の中心たる日本橋區の中軸にありて、我が國路程の起點に御座候。これは明治四十四年に改築せられたるものにて、所謂御江戸の日本橋は東京の日本橋と相成、帝都の美觀を添へ居候。其の七は七年の星霜と三百萬圓の經費と七十四萬人の職工とによりて竣功し、大正三年十二月十八日を以て開場式を擧げたる東京驛にこれ有り、開場第一着に名譽ある青島攻圍軍司令官(一)神尾將軍を迎へ候。貴君をこゝに迎ふるの日も遠からざる事と、指折數へて待居申候。尚末ながら御尊父

仲見世　觀音堂前の參詣道の両側に並ぶ商店。
奥山　淺草公園の境内。觀音堂の裏手及び附近の稱。
加賀屋敷　加賀の舊藩主前田侯爵家の舊邸。
(一)陸軍大將神尾光臣。

様始め皆々様へも宜しく御傳聲下され度候。頓首。――藤井乙男の文による――

四　少年の美德

乃木大將訓話

(一)

亞米利加(一)マッサチューセット州の或片田舍に、一つの中學があつた。其の一級に凡三十人程の學生のある中に、ハリス(二)といふのは、歳は僅かに十四歳であるが、級中に於てのみでなく、學生の全部五百人以上の中で、第一の才子と稱せられ、校長から特別の賞牌を授けられた。然るに瓊玉の微瑕ともいふべき一つの缺點に、ハリスは其の性格が少しく眞面目を缺き、虚榮に憧れる癖があつた。

こゝに彼の同級生にホプキンス(三)と呼ぶ同年輩の俊才があつた。其の學才は遙にハリスに劣り、怜悧といふよりも篤實、利發といふよりも沈重であつた。而も此の青年には生れつき一種の貴い性質があつて、僞善や虚僞を惡み、名よりも實を愛し、沈默して、自分の正しいと思ふ所を最後まで實行した。

ホプキンスは又非常な勉强家で、其の學才の劣る所を勉强で補ひ、ハリスが

(一)Massachusettes.　米國東海岸の一州。首府をボストンといふ。
(二)Harris.
瓊玉の微瑕　立派な玉に至つて小さいきず。
虚榮　うはべの見えをはること。
(三)Hopkins.

毛頭　すこしも。

聲望を博す　よい評判をとる。

煽動　おだてる。

愚弄　からかつてばかにする。

激怒　ひどく腹をたてる。

一時間で勉強し終るものは、此のホプキンスは二時間で終つた。さうして教室へ出ては、成績は餘りに優劣なく、只はしたの點數の違が此の二人の席次を上下して居つたから、自然互に競爭の狀態となつた。しかし此の競爭はハリスにとつてのみのことで、ホプキンスには競爭などといふ考は毛頭なく、只眞面目に終始變らず勉強して、自分の正しいと思ふ所を踏んで行つた。かうなると例のハリスの性格として、ホプキンスが自分よりも多く聲望を博するのではないかと、非常に苦心した結果、力めてホプキンスの缺點を人々に吹聽するやうになつた。或休の日、ハリスは數多の同級生と共に、學校の附近で野球をして遊んで居ると、遙向ふからホプキンスが一匹の乳牛を牽いて來るのを見た。これは牛を共同牧場へ牽いて行くのであつた。ハリスは折こそ來れと内心に喜びながら、他の同級生を煽動してホプキンスを愚弄し始めた。ハリスと他の學生等は、代る〳〵に大聲を發してホプキンスを嘲弄して、「おい田舍の牛乳屋。牛乳の代價は今どれ程か。餘り高く賣つてはいけないぞ。また如何に安くつても、乳に水を混ぜてはならないぞ。」などと言つた。ホプキンスは激怒するかと思へば、

雷同　わけも無く人の説に同意すること。

更に其の事なく、たゞ無言で笑ひながら用事を果して、常の如く禮をして家路へ歸らうとした。ハリスは此の日ホプキンスが田舍の百姓の外使用せぬ粗末な長靴を穿いて居るのを見付けて、後から大聲で、「諸君あの當世流行の赤革の長靴を見たまへ。」と呼んだ。また其の靴が小さいと見えて、ホプキンスは甚だしく跛ひくのを見て、雷同した他の青年は輕蔑した大聲で、「あの當世流行の歩きやうを見たまへ。」と言つた。

次の日も、ホプキンスは例の通り、乳牛を共同牧場へ送り届けたが、ハリス及びこれに煽動されて前日ホプキンスを嘲笑した學生等は、今日は定めて怒つて居るに相違ないと思つて居つたが、意外にも全く平氣で、相變らず赤の長靴に跛ひいて、汚い帽子を冠り、汚れたカラ、カフスのまゝであつた。其の後二週間も、毎日々々同じやうに、平氣で乳牛を共同牧場へ送り迎へして、同じ服裝で學校へ來たから、終には學生のみならず、教師中にも、彼を嘲笑した者さへあつた。しかし彼の心中には、人の嘲笑などによつて動かされぬ立派な考があつたのである。

(一)Me'al. 賞牌。

(二)

話は少し變るが、此の學校の慣例では、學年の終になつて、數種の賞狀とメタル(一)を、優等生に與へる事になつて居つた。其の褒美の中には、一箇の金のメタルがあつて、是は其の學年中に、全州の諸學校中で、道德上最も善行の著しい學生を出した時に、與へられるものであつた。それで此の學校の褒賞授與式の日は、慣例によつて學生の父兄は勿論、町の重立つた人々が、千を以て數へるほど大勢、學校の大講堂に集るのであつた。さて其の日になつて、賞狀やメタルの順次にそれ〴〵優等學生に渡された時、最後に殘つた金のメタルは、本年は誰も之を受ける程の事をした者があつたことを聞かぬから、式もこれで終であると思つて、大勢の來賓は皆立つて歸らうとした。其の時校長は突然聲を張上げて、「本日此の名譽ある金のメタルを受ける程、眞の價値ある善行をなした青年が本校から出たことは、誠に滿足の至であります。」と言つた。パリスもホプキンスも、校長の言ふことを不思議に思つて聽いて居た。パリスは「金のメタルを受けるやうな事をした學生があるとは聞いた事がない。何か間違ではあるまいか。

若し萬一にもあるとすれば、實に妬ましい事だ。」と思つて居り、ホプキンスは「此の學校から本年金のメタルを受ける樣な人が出たのは、實に賀すべき事である。且自分などは何の善行もなさぬが、誠に耻入る次第である。」と思つて居つた。校長は尙言葉を續けて、「此の眞の名譽ある青年とは、第四年級の」と言つたので、ホプキンスは不思議であると思つたが、聽いて居ると、「ホプキンスである。」と言はれた。ホプキンスは驚いて、自分の耳を信ずることが出來なかつた。母親も此の席に來て居たが、やはり何かの間違であらうと思つて居つた。すると何時の間にか、學校の一人の敎師がホプキンスの後へ來て、肩を押へた。公衆は一齊にホプキンスを見詰めた。ホプキンスは全く譯が分らぬから、敎師に促されて顏を赤くして立つて居つた。此の時校長は言つた、「人は眞の善行を爲すことは誠に難いことである。又たとひ善行を爲しても、之を自負せぬ人は誠に罕(まれ)である。然るに此のホプキンスは、多數の人の爲し得ぬ善行を爲しながら、決してそれを誇らぬばかりでなく、其の自ら爲した善行が善であるといふ事さへ、實際自覺せぬといふのは、實に比類の無い美しいことである。余は既に六十の歲を越

自負(じまん)。

したが、此の長い一生涯に、未だ曾て一度もこんな美しい行爲をした青年に遭遇した事がない。」と言つて、両眼から熱い涙を流して喜んだ。ホプキンスは性來實直な青年であるから、此の時までも、まだ夢に夢みる心地で氣がつかず、やはり何かの間違であらうと考へ續けて居つた。校長は感極まつて言葉も出ぬ程の有樣であつたが、暫くして、此の善行とは如何なる事であつたかを、公衆に向つて述べた。

此のホプキンスの家は、元來貧しい上に、父が早く死んで、二歳の時から母親の手一つで養育されたが、彼は至極眞面目な心をもつて居る青年であるばかりでなく、他人に對して、同情心が篤かつた。彼の家は學校から一哩ほど隔つて居る小さな村に在つたが、或日彼が學校へ行く途中で、數人の子供が凧を揚げて居る處へ、馬に乘つて通りかゝつた人があつて、其の馬が凧の絲に懸つたので、驚いて荒出した爲に、ちやうど其處を通り掛つた一人の子供を打倒してしまつた。それを見たホプキンスは、一刻の猶豫もなく、直ちに其の傍に馳寄つて、其の子供を抱起して、色々と介抱し、果ては自分の肩に其の子供の手を掛けさ

不如意思ふやうにならぬ。

せて、負ふやうにして、程遠からぬ其の子供の家へ連れて行つた。其の家には一人の年寄つた盲目の婦人が居つた。是は其の子供の祖母であつた。此の子供は幼い時に両親を喪つて、此の一人の祖母の養育を受けて育つたが、今は生計も不如意で、只一匹の乳牛を所有して居るばかり、老婦人が搾つた乳を子供が賣つて、僅かに生計を立てゝ居つた。子供は毎朝共同牧場へ連れて行つて、夕方連歸るのを常として居つたが、怪我をしたのは其の朝牛を牧場へ連れて行つて、家へ歸らうとした途中の事であつた。そこでホプキンスは、直ちに近所の醫者を迎へて來て、手當を受けさせてやつたので、老婦人は其の親切を非常に感謝した。併し彼は老婦人の話で、藥代を拂ふ金の用意が無い事、子供の病床に在る間は牛乳を配達する事も、牛を世話する事も出來ぬと云ふ事を知つたので、此の老婦人をいろ〳〵と慰めた。それで子供が病床に在る間は、自分が代つて牛乳の配達を爲よう、また牛を世話してやらうと約束した。それから藥代は自分が其の朝靴を買ふために母から貰つた五弗の金を惠まうとしたが、老婦人のいふには、「それでは誠に御氣の毒ですが、此の子の爲に昨日買つた一足の粗末

な赤皮の靴があるから、我慢してそれを使つて下さい。」と氣の毒さうにいつた。そこで彼は直ぐ其の五弗の金を老婦人に渡した。其の靴は粗末なばかりでなく、自分の足には少し小さいけれど、それを受取つて、毎日學校へ履いて行つたから、跛ひくといつて他の學生に嘲弄された譯であつた。其の後此の子供の全快するまで、二十日間、いふものは、毎日毎朝、雨の降る日も、風の吹く日も、一方には牛の世話をしながら、一方には牛乳の配達をしてやつたのであるが、誰も此の事實を知つて居る者はなかつた。勿論ホプキンスは母にも告げなかつたから、母親も知らなかつたのである。

抑〻人の善行をなす動機にもいろ〳〵あつて、或は褒められるが爲に行ふとか、自己の利益の爲にするとかいふやうな事が往々あるが、此のホプキンスといふ青年は、褒められたいといふ目的があつたのでなく、又利益を得ようと思つたのでもなく、ひたすら他人の不幸に同情を寄せたのみのことで、其の行が他人にどう見えようが、更に顧る暇が無かつたのである。

春の野に妍を競ふ百花が美しいと言つても、此のホプキンスの行爲に含まれて居るうるはしさとは到底比較にならぬ。次に彼の此の行爲を解剖すれば、第一に眞面目といふことを以て一貫して居り、次に信義があり、禮義があり、勇氣があり、奮鬪といふことがある。殊に此の青年をして他人の嘲笑罵言を顧るの暇なからしめた至濃至溫な同情があつた。若し今爰に如何にせばかくもうるはしく善行を爲すことが出來るかといふ問題が、君等の一人から起つたとすれば、私は斯樣に答へる。かくの如き眞の善行は、決して無理に深い井戸から水を汲出すやうにしたのでは行ひ難い。たゞ自然に溢れ出る泉の如きものでなければならぬ。水は結果であつて、其の泉さへあれば自然に湧出する。行は結果であり、心は原因である。故に日常眞面目、信義、禮義、奮鬪、同情、勇氣等を愛する心が先づ必要で、是等が心の中に充實して居れば、事に當つて必ず溢れ出るものである。」と答へたいと思ふ。故にうるはしい心を養はねばならぬ。ホプキンスの如く、一度これは義なりと覺つた以上は、之を最後まで遂行せねばならぬ。眞に義を愛する人であるならば、何物にも勝つて其の義を最も緊要なものと考へるに相違ない。かくの如き人ならば、

妍を競ふ　うつくしさをあらそふ。

充實　十分にそなはる。

遂行　やりとほす。

緊要　なくてならぬ大切な。

必ず勇氣を得て飽くまで事を遂行し得るに相違ない。吉田松陰先生の言に「士道莫大於義、義因勇行、勇因義長」といふ事があるが、人が完全に德義を遂行しようとするには、必ず此の義と勇との二つが相伴なはねばならぬ。

――服部他助、恩師乃木院長による――

改訂

帝國讀本卷一終

通用字及び正字對照表

（玆に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。）

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
丙	兩	剪	翦	塲	場	戟	戟	楕	橢
仞	刃	劔	劍	塚	冢	戲	戲	欵	款
佞	侫	効	效	墻	牆	拘	拘	殲	殲
免	免	勺	勺	寃	冤	拿	拏	殺	殺
兎	兔	卑	卑	寇	寇	拔	拔	畫（畫）	書
円	圓	即	卽	寶	寶	挿	插	毒	毒
冐	冒	厨	廚	尅	剋	捏	捏	留	畱
決	決	廐（厩）	廄	帽	帽	攜（携）	攜	潤	潤
況	況	双	雙	并	幷	整	整	潛（潛）	潛
准（準）	準	収	收	廩	廩	既	既	焔	焰
減	減	唇	脣	徃	往	昂	昂	熔	鎔
涼	涼	叙	敍	廻（廻）	廻	昂	昂	焔	焰
凡（凡）	凡	器	器	恒	恆	晋	晉	猿	猿
凾	函	噴	噴	慂	慂	夾	夾	猪	豬
及	刃	田	回（回）	懺	懺	桿	杆	献	獻

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
頴	穎	窃	竊	竪	豎	羨	羨	舗	鋪
秘	祕	罰	罰	羣	羣	阜	阜	覧	覽
頤	頤	纏	纏	致	致	褒	褒	軟	輭
篡	簒	簸	簸	恥	恥	館	館	解	解
粘	黏	胆	膽	蒔	蒔	艷	艶	記	記
穀	穀	脉	脈	萌	萌	讎	讐	針	鍼
紀	紀	膓	腸	蛩	蛩	象	象	鐵（鐵）	鐵
纖	纖	膝	膝	衛	衛	豹	豹	鎖	鎖

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
隣	鄰	駄	駄	隷（隷）	隷	隙	隙	隔	隔
輒	輒	麺	麪	薬	藥	鬱	鬱	鶴	鶴

同字表（いづれにてもよし）

冊	册	叶	協	姉	姊	嶋	島
並（竝）	竝	冨	富	嚼	齧	娉	聘
亡	亾	冲	沖	坂	阪	婚	婚
京	亰	勅	敕	野	埜	弊	獘
俟	竢	厠	廁	妊	姙	峨	峩
萬	万	冊	册	叶	協	姉	姊
偖	倣	廝	廝	妍	妍	峯	峰
嶋	島	忘	忘	温	温	考	考
庵	庵	慙	慚	弊	獘	強（彊）	強
京	亰	勅	敕	野	埜	岳	嶽
俟	竢	厠	廁	妊	姙	峩	峩
村	邨	普	普	攷	考	強（彊）	強

柿 柹 毘 畍 砧 碪 網 綱 荒 荒 躊 躇
案 桉 汙 汚 稿 藁 総 總 蔭 蔭 遁 遯 鉾 矛
棊 碁 棋 温 溫 競 競 綵 裸 虱 蝨 鉾 矛
棕 稷 烟 煙 筍 笋 組 縕 衽 袵 銹 鏽
楫 楫 無 无 笄 笄 羈 羈 訛 譌 陰 陰
槁 藁 狢 貉 粽 稷 舩 船 譁 嘩 雁 鴈
概 槩 狸 貍 糺 糾 艪 櫓 谿 溪 雞 鷄
朴 樸 睹 覩 紆 紆 花 華 踪 蹤 駈 驅

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中＊標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

＊亙（クワン）亘（コウ）
ワタル。「連亙」
桓ニ同ジ。

＊体（ホン）體（タイ）
笨ニ同ジ。アラシ、麁、粗。
カラダ。

＊但（タン）但（シヨウ）
タヽシ、タヽ。「但馬」
ツタナシ、拙劣。

＊僭（センテツ）僭（セン）
ミダリガハシ、猥。
身分ヲ越エテオゴル。「僭越」

＊冑（チウ）胄（チウ）
カブト、兜。「甲冑」
ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」

＊協（ケフ）協（ケフ）
カナフ、叶。
オビヤカス、脅。

＊刺（シセキ）刺（ラツ）
サス。「刺殺。刺客。名刺」
モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」

＊台（タイ）臺（タイ）
星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
ウテナ、ダイ。

＊后（コウ）後（コウ）
ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
キミ。「皇后」

＊商（シヤウ）商（テキ）
アキナヒ。
モト、本。

壺（コン）壺（コ）
ツボ。
ミチ、宮中ノミチ。

＊姫（シン）姫（キ）
ツ、シム。
ヒメ。

＊托（タク）託（タク）
拓ニ同ジ。オス、ヒラク。
ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。

＊担（タン）擔（タン）
ハラフ。又アグ。
ニナフ、カツグ。

＊改（カイ）改（イ）
鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
アラタム。

＊槍（サウ）鎗（サウ）
鏘ニ同ジ。鐘ノ聲ノ形容。

＊欠（ケン）缺（ケツ）
アクビ。「欠伸」
カク。「缺席」

＊糸（ベキ）絲（シ）
ホソイト、細絲。
イト。

＊羨（セン）羨（イ）
支那ノ地名。
ウラヤム。

＊虫（チユウ）蟲（ギ）
魚介類の總稱。又マムシ。
シム。

＊詫（タイ）詫（タ）
ワビ、ワブ。「詫狀」
詑ニ同ジ。アザムク。

＊諂（タウ）諂（テン）
ヘツラフ。
ウタガフ、疑。

＊證（セイ）証（セイ）
アカシ、シルシ。「證明」
イサム、諫。

＊豐（ホウ）豐（レイ）
禮ノ古字。
ユタカ。

＊迄（セフ）迄（キツ）
マデ。
ユク、行。

＊選（セン）撰（セン）
エラブ。（ヨリトル）
エラブ。（書物ヲ編纂ス）

郤（ゲキ）　ヒマ、隙。
卻（キャク）　シリゾク。「退卻」
鍛（タン）　キタノ、「鍛錬」
鍛（カ）　シコロ、鍛。

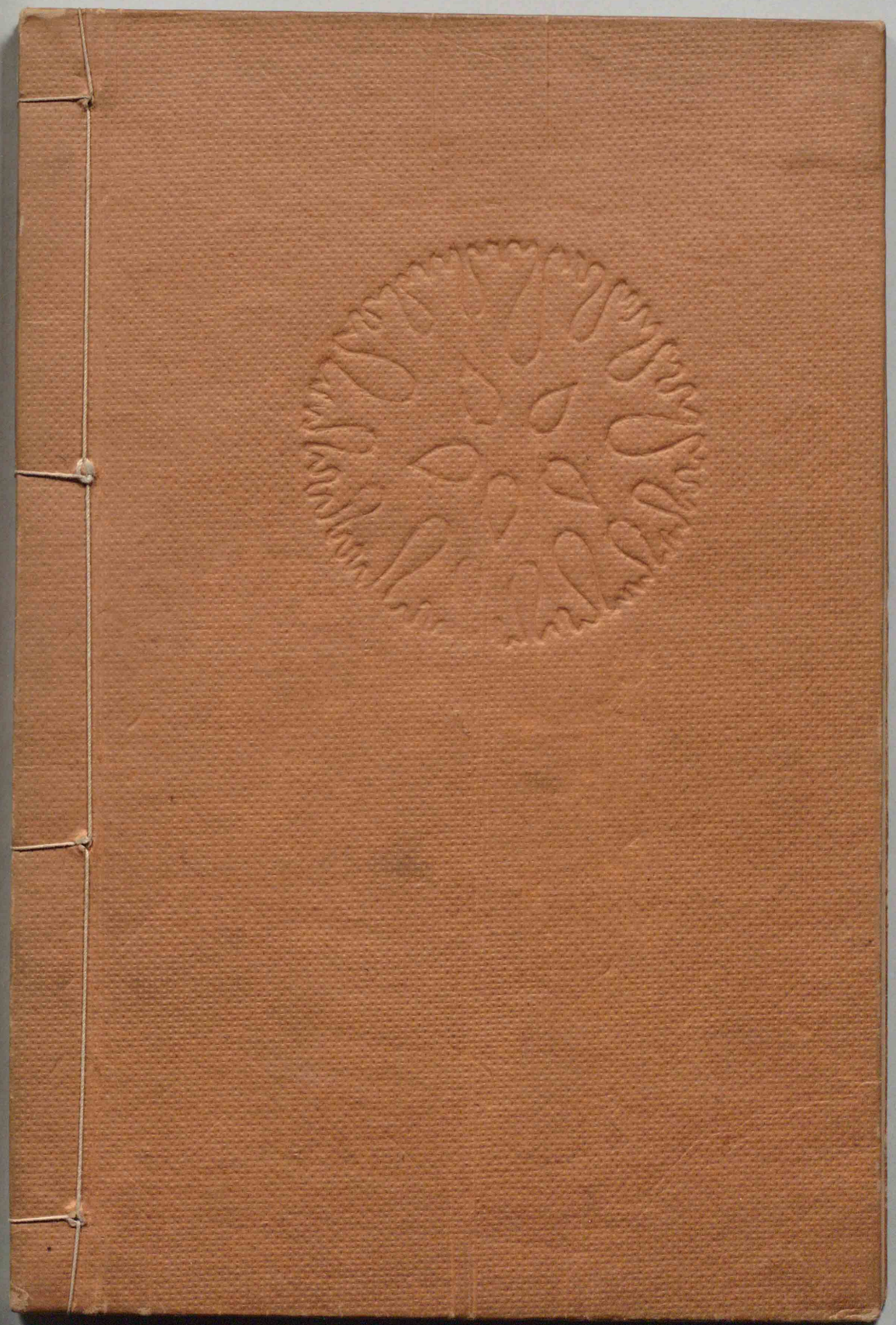
宛字（左の如き字は假名を使用するをよしとす）

おぼつかなし　覺束なし
かひ（詮の意の場合）　甲斐
きつと　屹度
さすが　流石、遉
しまふ　仕舞ふ
だけ　丈
だめ　駄目
ちやうど　丁度
ちよつと　一寸、鳥渡
でたらめ　出鱈目
とう〳〵　到頭
とかく　兎角、左右
とて、とても　迚
とにかく　兎に角
なか〳〵　中々、却々
ふるまひ　振舞
はかなし　果敢なし
ほんたう　本當
むだ　無駄
むづかし　六ケし
やたら　矢鱈
やはり　矢張

附錄終

大正六年十一月五日印刷
大正七年二月二日訂正再版印刷
大正七年二月五日訂正再版發行
大正七年十月十一日改訂印刷
大正七年十二月十四日改訂發行
大正七年十二月十三日改訂三版印刷
大正七年十二月十三日改訂三版發行

改訂帝國讀本
定價　卷一、二各金參拾八錢　卷三、四各金參拾六錢　自卷五至卷十各金參拾錢

著者　芳賀矢一
東京市神田區裏神保町九番地
發行兼印刷者　合資會社　冨山房
合資會社冨山房社長
代表者　坂本嘉治馬
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷所　合資會社　電新堂
東京市神田區裏神保町九番地　合資會社　冨山房
長電話本局一〇三六・本局四一三〇番
振替口座東京〇五一番

著作權所有